



て終ひました。お婆さんはもう美佐男には關はずに、そのまゝ支那人の後へ續いて行きました。三度まで打ち殺すと威しつけられた美佐男は、もう其の上みどりを取り戻さうとすることが出来ませんでした。一足一足と遠ざかつて行く三人の姿を、うろ／＼と足摺りをして見送り、はら／＼と首を差延べて見送りながら、足はひとりで三人の方へ向つて行きました。間もなく三人の姿が物の蔭に見えなくなると、夢中で其處まで驅けて行きました。其處の物蔭から三人の後姿を覗きました。近づかうとして近づくことが出来ずに、其處から覗いたまま、唯だはら／＼して居ました。けれども、突然爆發したやうにけたたましく叫ぶみどりの叫び聲を聞くと、突き飛ばされたやうに慌てて蛇の檻の前へ飛び出して行きました。

その時、美佐男は眼がくらんだやうに思はれました。鋭く泣き叫ぶみどりの聲に驚きながら、いきなり蛇の檻の前に駆け付けた時、眼かくしを外して檻の中



へ投げ込まれたみどりは、氣が狂つたやうに檻の中を狂ひ廻りながら、血を吐くやうに悲鳴を擧げてゐました。

美佐男は天地が一度にひっくり返つたやうに思はれました。みどりはもう正氣のあるものとは見えませんでした。眼は血走つて、顔は青ざめて、もう何もかも分らなくなつて、ぶる／＼と夢中で檻の中を駆け廻りながら、咽喉をしめられるやうな鋭い悲鳴をあげてゐました。みどりの足許には一丈に近い大きな蛇。ぎら／＼と黒いダイヤモンドのやうに眼の光つてゐる蛇。背中には金のやうに輝いてゐる鱗をもち、腹には赤い色と白い色をもつてゐる蛇。そして、その檻の外には、さうして狂ひ廻るみどりの周圍を、のろ／＼と大きい鎌首をもちあげて這ひ廻る蛇を猫が鼠をねらうやうな様子をして、じつと残忍な眼を睜つてゐるお婆さんと支那人の姿。



美佐男はそのお婆さんと支那人の姿を見ると、

「お婆さん」

と、慌てて檻の角を廻つて、お婆さんの袖にしがみつきました。

「お婆さん、いけない。いけない」

と、袖にしがみ付いて夢中で言ひました。

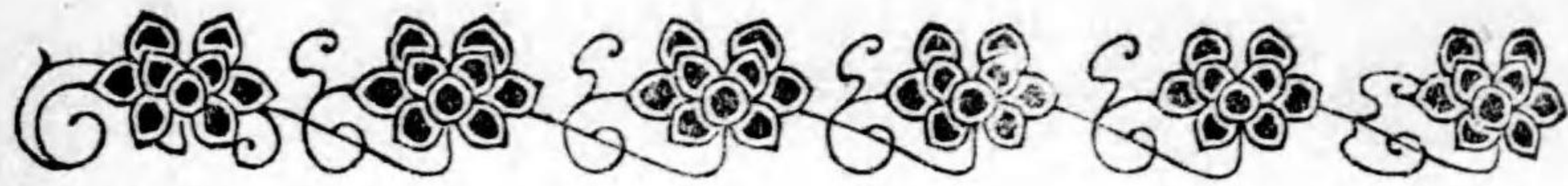
「騒ぐな」

と、お婆さんの聲が走りましました。

「馬鹿」

と、支那人の罵る聲が続きました。

檻の中にはみどりの狂亂と悲鳴が続き、檻の外には美佐男の狂亂と悲鳴とが續



きました。

「騒ぐな」

と、お婆さんに叱られても、もうその聲が耳に入らないかのやうに、

「いけない、お婆さん。いけない、いけない」

と、美佐男は狂亂の悲鳴を挙げました。

「何を言ふのだ。馬鹿」

と、手荒く地べたへ突き倒されても、美佐男は直に起き上りました。狂ひ廻つて泣き叫んでゐるみどりの姿を見ながら、うろくと檻の周圍を駆け廻りました。みどりは夢中でがりくと檻の金網を掻きむしりました。金網の上に攀ち登らうとしました。けれども、のろくと足許に近づいて来る蛇の恐ろしさに、又駆け出して金網に突き當りました。金網に突き當りながら悲鳴をあげて狂ひ廻りました。



「君。僕だよ。僕だよ」

と、美佐男は一緒に聲をあげて泣きながら、

「早く。早く」

と、檻の入口へ手をかけました。

「開くものかい。馬鹿」

と、お婆さんが言ひました。

「開けて、お婆さん。此處を開けて、此處を開けて」

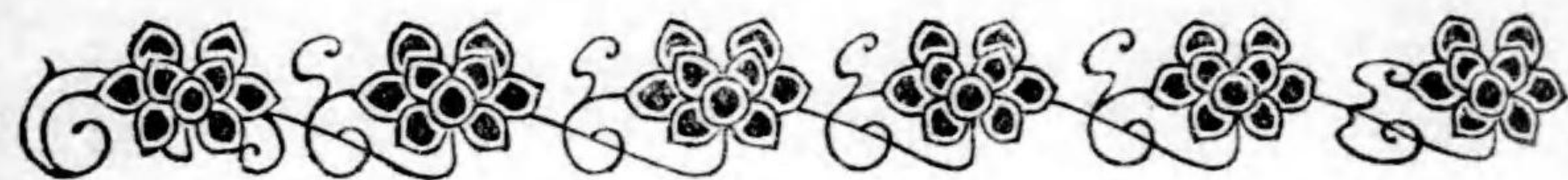
と、美佐男が言ひました。

「なにを言ふのだ」

「開けて。開けて。開けて」

美佐男は破れる許りに金網を叩きました。

その時、躓いては倒れ、躓いては倒れて、幾度か起き上つて駆け廻つてゐたみ



どりは、また躓いて蛇の背中に倒れかかりました。みどりの口からは切られる

やうな鋭い叫び聲が出ました。蛇は恐れたやうに傍へそれて行きました。けれ

ども、みどりはくるりと仰向けになると、きりくくと齒を喰ひしばつて、それ

きり手足を動かさなくなりました。

お婆さんと支那人の口からは、同時に驚きの叫び聲が發しました。

「氣絶したやうだ」

と、二人は慌てて入口の鍵を外しました。鍵を外して檻の中へ飛び込んで行き

ました。

けれども、檻の戸が開くと同時に、眞つ先に中へ飛び込んだのは美佐男でし

た。眞つ先にみどりの體へ手をかけたのは美佐男でした。

「君、何うしたの、何うしたの」

と、美佐男はみどりの上へのしかつて言ひました。お婆さんと支那人とは突

つ立つたまま、

『とうとうやつたな』

と、みどりの氣絶した姿を覗き込んだ許りでした。けれども、美佐男は泣きながらみどりの體にとりついて、

『君。僕だよ。僕だよ。君。君。君。』

と、聲を張り上げてみどりを呼びました。

三

それから幾分間の後には、みどりは座敷の中の蒲團の上に横たはつてゐました。血の氣のなくなつた顔は痛ましく死人のやうに青ざめて居ました。もう息のあるものとは思はれぬやうに眼を閉ぢて居ました。時偶小米のやうな齒を食ひしばつて、キリキリと苦しげに齒ざしりをしてゐました。

傍にはお婆さんと支那人とが坐つて居ました。そして、その後には悲しげにすすり泣きをしてゐる美佐男が坐つてゐました。美佐男はたまらなく氣づかはしげにみどりを見まもつてゐました。けれども、かう言ふ時にもなほその慘忍の性質を失はないお婆さんと支那人とは

『もう大丈夫のやうだ』

と、犬や猫の苦しみを見るほどにも思はないやうに言ひました。

『もうかうして置けばよろしい』

と、支那人は平氣な顔をして言ひました。

『飛んだ騒ぎをさせたが、もう大丈夫のやうだ』

と、みどりの痛々しい姿を他所事のやうに見ながら、

『だが、何時までもこんな風だと埒があかないな』

と、お婆さんは氣を腐らしたやうに、言ひました。



『こんなでは何時興行が出来るか解らない』
と、支那人は不満げに頬をふくらし、
『一體お前さんが悪い。此の子を買ひ取る時に、蛇の好き嫌ひを確かめなかつたからいけない』
と、お婆さんに喰つてかゝりました。
『そんなに言はなくてもいい。お前さんはわしのせいに許りしたが、此の子が悪いのだから仕方がない』
と、お婆さんも支那人といがみ合ひました。二人はかうして苦しげに齒ざしりをしながら、半死の姿で横になつてゐるみどりを前に置いて、
『一日後れば一日後れるだけ、取れる金が取れなくなる』
と、興業のことを口にして愚痴を言ひ始めました。
『仕方がない。此の子は此の儘にして、今度はあの女の方だ。獅子の方だ』



と、苦しげにうめいてゐるみどりをそのままにして、間もなく其處を出て行つて終ひました。
其の時の美佐男のいぢらしさ。美佐男は悲しげに下唇を噛みしめて、しやくり泣きながら、みどりの様子を見まもつてゐました。お婆さんと支那人が出て行くくと、優しくみどりの耳許へ口を寄せて、
『君。君』
と、氣づかはしげに呼かけました。
みどりは惱ましげに薄眼を開きました。しげくと美佐男の顔を見入つて、
『ああ、あなたなの』
と、夢を見てゐるやうに言ひました。
『君、もういいの』
と、美佐男はその様子を見ると安心したやうな顔付をしました。涙に濡れた眼



を悲しげにみどりの顔に注いで、夢をみてゐるやうな様子をしてゐるみどりの顔を見つめました。間もなくみどりはぱつちりと眼を睜りました。自分の傍に坐つてゐる美佐男の顔を見定めて、

『あたし何うしたんでせう』

と、つきものが落ちたやうにきよとんとして四邊を見廻しました。

『君、もういいの。大丈夫なの』

と、美佐男はみどりの顔を覗き込むやうにして、

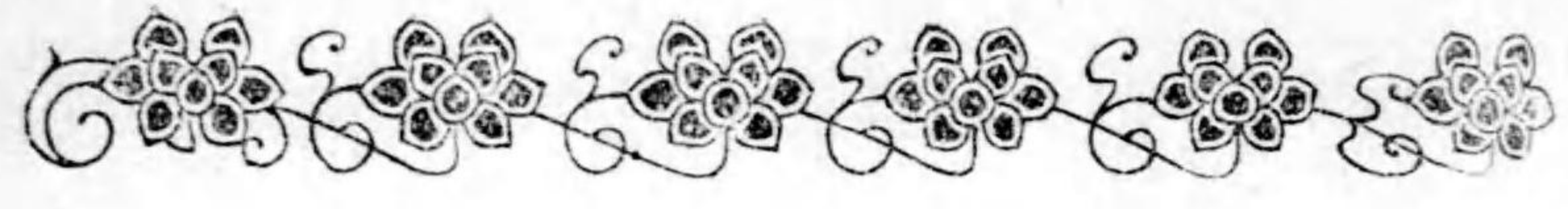
『君、なせそんな顔をしてゐるの。僕だよ。』

僕なんだよ。君には僕が解つてるの。え、

僕が解つてるの』

と、泣き顔を崩して笑つて見せました。

『ええ、ええ』



と、みどりは氣の抜けたやうな顔付をしながら、懐かしく嬉しげに黙頭いて見せました。

四

『よかつたね、君。よくなつてよかつたね。』

僕はそりやア心配をしてゐたんだよ。僕はもう君が死んで終つたんぢやないかと思つてよ』

『あたしが』

君、知らなかつた。何うしたか知らなかつたの。僕は先から此所の所に坐つてゐたんだよ』

『さう』

と、みどりは氣落のしたやうに弱々しく言つて、



『あたし、頭が痛い』

と、泣きさうな様子をしました。

『頭が痛いの？頭が痛いの？』

と、直にみどりの頭を揉んでやらうとしました。みどりは額へ手を當てて、

『此處イ等が。此處イ等が』

と、苦しそうにぐりぐり揉むと、

『其處が痛いの、ちや、僕が揉んであげよう』

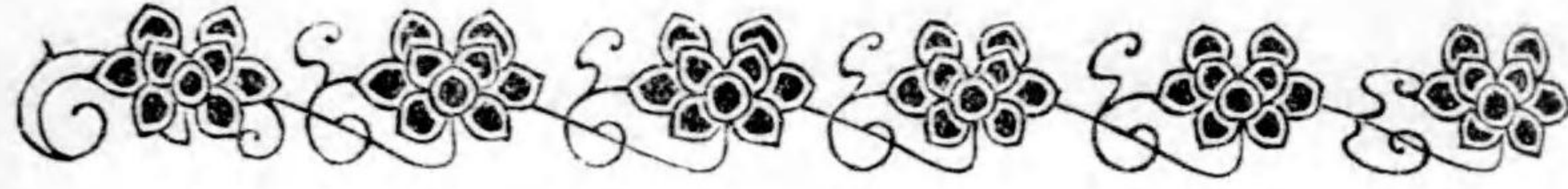
と、美佐男はみどりの手を取り除けて、

『ね、僕が揉んで上げよう』

と、自分の手をみどりの額に當てました。

『此處イ等。え、君。此處イ等』

『ええ、ええ』



『此處イ等でいいの』

『ええ、ええ』

みどりは甘へるやうに黙頭きました。美佐男は優しく額を揉み始めました。

『君、この位で痛かないの』

『ええ』

『もつときつく揉んでも大丈夫？、え、君。』

『もう少しきつく揉んで上げようか』

『ええ、ええ』

『あんまりきつく揉んぢやあ痛かない？ この位。え、この位』

『ええ、ええ』

と、みどりは嬉しげに黙頭いて、美佐男の揉んでくれるまゝになりました。間もなく、閉じてゐた眼を開けて、じつと美佐男の顔を見つめながら、



「美佐ちゃん」

と、急に嬉しい涙にそゝられるやうに美佐男の手をとりました。

「なに、君」

「美佐ちゃん」

「なんなの。なぜ僕の顔を見てゐるの」

と、美佐男が優しく眼を睜つて言ふと、

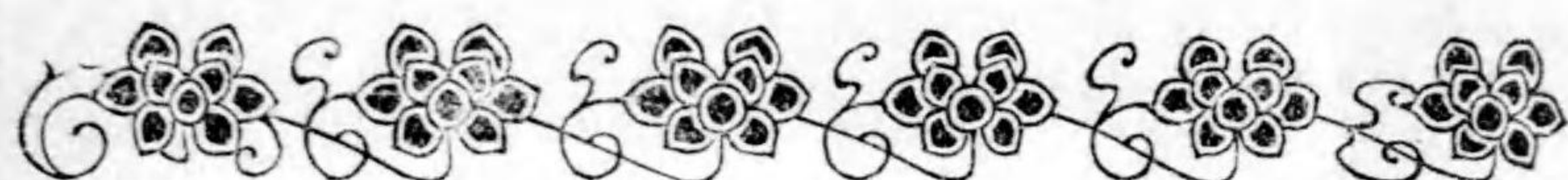
「美佐ちゃんはいいい人ね」

と、みどりは眼の中に涙を浮べて言ひました。

「何うしたの。え、みどちゃん。なぜそんなことを言ふの」

と、美佐男が優しくすればするほど、みどりの眼の中には溢れるやうに涙が湧いて來ました。

「え、君、何うしたの。何うしたの」



と、美佐男は言葉忙しく聞きました。

みどりはきつく美佐男の手を握りしめて、

「美佐ちゃん。美佐ちゃん」

と、泣きながら言ひました。

「なぜ泣くの。え、なぜ泣くの」

と、美佐男もそゝられる悲しさに堪へないやうに言ひました。

「君、泣くのを止し給へ。ね、泣くのを止し給へ」

と、氣づかほしげに慰めました。慰めれば慰めるほど、みどりは次第にむせび

泣く忍び音の泣き聲を高めて行きました。堪へて居ることの出來ないやうに聲

をはづませて泣く忍び音の泣き聲を高めて行きました。美佐男ももう我慢をし

てゐることが出來なくなつたやうに、しくしくと悲しげに泣き始めました。

「泣いちゃ厭。泣いちゃ厭」

と、泣きながらみどりに言ひました。

五

みどりと共に北國から浚はれて来た若い女が、暗い穴倉から獅子の檻の前に引き出されて行つたのは、それから間もないことでした。その時、女の姿は痛ましく窶れ果てて、顔は死の相を宿してゐるやうに青ざめました。眼は物狂ひした狂女のやうに赤く血ばしつてゐました。もう幾日となく櫛の齒を入れたことのない亂れ髪、幾筋となく額は垂れかかつてゐる後れ毛の惱ましき。晝も日の目を見ることのない眞つ暗な穴倉から、急に眩しい明るみに引き出されてなよ／＼と足を運ぶことさへ堪へ得ぬやうに見える弱々しさ。うな垂れて悲しげに閉ぢてゐる口許には、もう死を覺悟してゐるやうふ絶望の色を見せてゐました。

取り逃がすまいとするやうに、自分を警護するお婆さんと支那人の様子を見ると、

『あたしは逃げやしません。もうそんな風にするのは止して下さい』
と、嘲るやうな淋しい笑を浮べて言ひました。

すると、お婆さんと支那人は氣味の悪げな苦笑を洩らして、

『お前が逃げようと思つても、逃がしはしないのさ』
と、言ひながら獅子の檻へ引き連れて行きました。

女が始めて獅子の檻の前に立つた時には、流石に女も胸を突かれたやうな驚きを見せました。けれども、みどりが蛇の檻の前に立つた時、悲鳴を擧げて逃げ廻つたやうに、女は檻の中の獅子を見ても、少しも騒ぎ立つ様子はありませんでした。再びその青ざめた顔を俯向けて、あきらめたやうに眼を閉じました。お婆さんは女を檻の前に立たせました。



『此の獅子を馴らすのがお前の役目だ。お前は今日から此の獅子を手懐けなければならぬのだ。いいか。若しわたし達の言ひ付け通りにしなければ可哀さうだがお前の命はないのよ』

と、宣告をするやうに言ひました。

女は無念さうに美しい眉を寄せて、

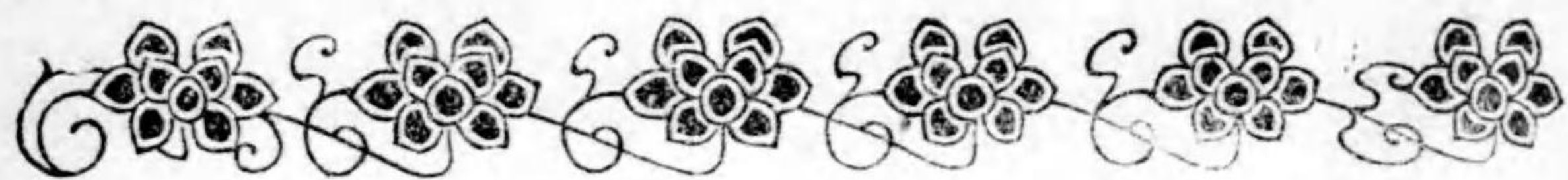
『もう、なんにも申しません』

と、顫えを帯びながら低く言ひました。

『その覺悟があればいい』

と、お婆さんは残忍な薄笑ひを洩らして、

『それではお前に言つて聞かせるが、お前は第一に優しい心にならなければならぬ。優しい心になつて獅子の檻へ入らなければならぬ。丁度お前がお前の子供にもつやうな優しい心だ。また、お前の夫にもつやうな優しい心だ。それ



がお前の第一に心得ることだ。さもなければ獅子はお前に馴れて來ない。何時までもお前になじんで來ない。唯だ、それ許りではない。お前が獅子に親しまない心をもつてゐれば、お前は獅子の餌食にならないとも限らないのだ』

と、頭から抑へ付けるやうに言ひました。

するとその時、女の顔には幽かに憤りの情が表はれました。

『もう澤山です。檻へ入れるなら早くお入れなさい』

と、女は凛として言ひました。

『なんだと』

と、お婆さんはびつくりしたやうな顔付をして、

『お前は怒つて居るのか』

と、じろりと鋭く女を見ました。



『いいから早く入れて下さい』

『怒つて居るのだな』

と、お婆さんはせせら笑つて、

『馬鹿め、怒りたければうんと怒るがいい。お前のやうな命知らずは獅子の餌食になるのが最後だ。お前の方から催促がなくなるとも、これからいくらでも檻の中に抛り込んでやる』

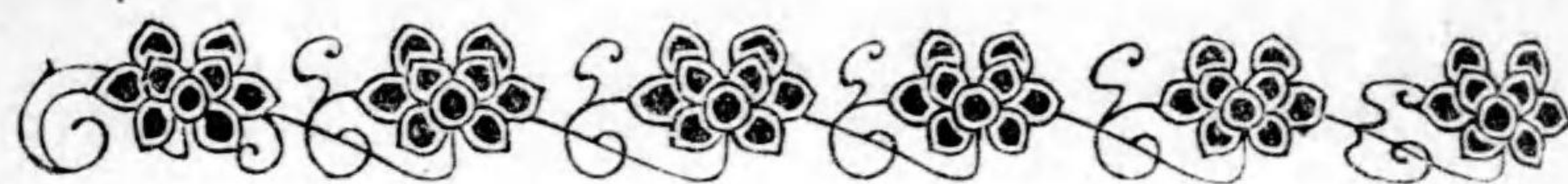
と、憎々しく言ひました。

支那人は二人の話をいらだたしげに聞き捨てて、

『プリンス、プリンス』

と、檻の中の獅子を呼びました。

前脚を突出して寝轉びながら、大きい眼を三人の方へ向けてゐた獅子は、支那人の聲を聞くとのつそりと立ち上りました。のそくと五六尺に餘る大きい體



を運んで、馴れくしく三人の前へ顔突き出しました。支那人は檻の扉を開けて中へ入りました。つかくと獅子の間近へ進み寄つて、

『何うした。プリンス』

と、靜かに獅子の鼻面を撫でてやりました。

『さ、入るのだ』

と、お婆さんが女を急ぎ立てました。

女は塑像のやうに身を固くして、お婆さんに導かれるまゝに中へ入つて行きました。内心には顫えて止まない烈しい恐怖を抱きながらも、じつと其の恐怖を抑へてゐるやうな様子をして、默然とお婆さんの後に立ちました。お婆さんは獅子の口にはめてある口輪の紐を持つて、ぐるぐると檻の中を引き廻してゐる支那人に眼を向けながら、

『お前、あれをよく見な』



と、女に顔を上げさせて、

『最初はあんな風に獅子を引廻すのだ』

と、獅子の様子を見せました。支那人は女の傍へ獅子を引いて来て、女にその綱を渡しました。

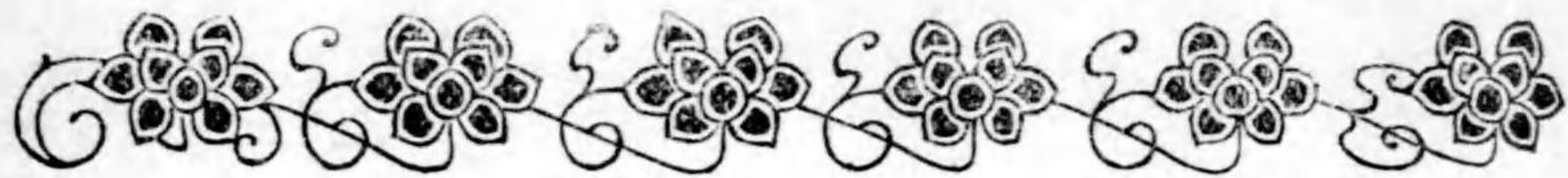
女は渡されるまゝに獅子の手綱を手に持ちました。

『さ。今やつて見せたやうに引廻して見な』

と、お婆さんと支那人とは檻の片隅に身を除けて、蛇が蛙をねらうやうな鋭い眼付をしながら、呼吸を殺してじつと女の様子を見まもりました。

六

その時、女の顔には激しい憤りの発作がありました。激しい憤りに燃え立つ血走つた眼に、じつと獅子の姿を見つめて、ふいと自棄を起したやうに、い



きなり手に持つてゐた手綱を力強く引つ張りましました。すると、お婆さんと支那人はびつくりして、

『馬鹿』

と、女の傍へ駆け寄りましました。支那人は女の手から手綱を奪ひ取りましました。お婆さんは慌てて女を檻の外へ突き出しました。お婆さんの後からは支那人が檻の外へ逃げ出しました。

『なんて真似をするのだ』

と、檻の外へ出ると同時に、お婆さんは手にする鞭で女の背を打ちましました。

『命知らずめ。あんな真似をして獅子が暴れ出したら何うする』

と、第二の打撃は打ち倒された女の背中に落ちましました。

『檻の中にあるのはお前一人ぢやないのだ。若しわたし達が獅子に飛び付かれたら何うする』

と、第三の打撃、第四の打撃は、猛り立つたお婆さんの手から締めぎまに女の背中へ落ちて行きました。女は物をも言はずに齒を食ひしばつて、蛇がのた打ち廻るやうに體を藻掻きました。續いて支那人から力任せに背中を蹴られるとぐるりと地べたをひと轉り轉げて、キリ／＼と苦しげに齒を食ひしばりました。

『不貞腐れめ。さ、立て』

と、支那人に浴せかけられる聲を聞いても、女は氣を失つたもののやうに地べたに突つ俯してゐました。

『起きないか。起きないか』

と、續いてお婆さんの鋭く浴せかける言葉を聞いても、女は打ち据えられた體を、生殺しにされた蛇のやうに波立たせてゐました。

『畜生。起きなけりや起してくれ』

と、お婆さんは女の襟首を掴んで、力任せに女を引き摺り起しました。それでもなほ、女は力を失つたやうにうなだれて終ひました。お婆さんと支那人とは無理に女を引つ立たせて、

『歩け。歩け』

と、手をもつて引き摺りました。女の着物は泥まみれになつて居ました。女の體はもう腰が立たない程痛んでゐました。けれども、お婆さんと支那人は痛々しい女を引摺つて、穴倉の中へ連れて行きました。

悲惨な光景は漸く幕を閉じました。けれどもなほ、穴倉の中からは絶え入るやうな女の呻き聲が洩れて來ました。お婆さんと支那人とは茶の間の長火鉢を挟んで、血のやうな赤い酒を自棄に飲み始めました。

『ほんとに馬鹿な女だ』

『世話のやける奴等許りだ』

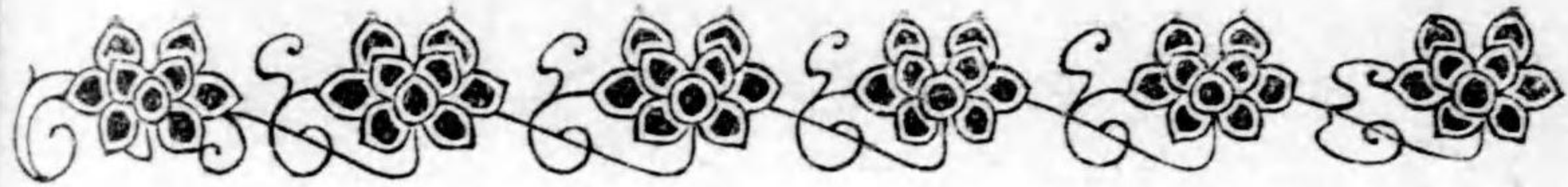


『あんな様子では、興行が心配になるな』
『ほんとにさうさ。だが、お前さん。あの女は此方の思つてゐた程獅子を怖がらなかつたぢやないか』
『それを思つて居た程怖がらなかつたな』
『あの鹽梅で見ると、そんなに心配をしたものではないやうだ。唯だ、腹を立てて日棄を起してゐたやうだ』
『さうだ。そんな様子だつたな』
『だから、さう案じたものでもない。わたしは今になつて氣がついたが、まああの女にはちつと甘い顔を見せる方がいいやうだ。さうするとあの女はきつと優しくなつて来るに違ひない。優しくなつて来れば、譯なく仕込みが出来ようと言ふものだ。お前さん、まあ、わたしのすることを見て居な。もうあの子の方も起きられるやうになるだらう。今度はあの子の番さ』

七

二三日の後には、みどりは床を起き出ることが出来ました。けれども、蛇の檻に投げ込まれた日の出来事は、どんなにみどりの心に恐怖を深くさせ、どんなに美佐男の心に不安を強くさせたでせう。直にもまた蛇の檻へ投げ込まうと話し合ひはしても、此の二三日のみどりの苦しげな様子を見ると、それほと無慈悲に、それ程残忍にすることが出来なかつたお婆さんと支那人とは、床を起き出て座敷の中を歩くことの出来るやうになつたみどりの様子を見ると、待ち構えて居たやうにみどりに蛇使ひの稽古着を着せようと思ひました。すると、みどりは蛇の檻に投げ込まれた日の以前よりも以上に、急に顔色を變へて恐ろしげに騒ぎ立ちました。稽古着を持ち出して来るお婆さんの姿を見ると、まだ稽古着を着せられない中から、もう檻の中へ投げ込まれたやうに騒ぎ立つて、けた





、ましく泣きながら座敷の中を逃げ廻りました。美佐男もみどりが檻の中で氣絶した日の以前よりも以上に、急に狂氣したやうにみどりを保護しました。けたましく泣き出したみどりの姿を見ると、まだみどりが檻の中へ投げ込まれないうちから、もうみどりが氣絶したやうに騒ぎ立つて、胸を踊らせながらみどりの後をついて歩きました。お婆さんは持て餘したやうに舌打をして、

『直に此の通りだ。仕様のない奴等だ』

と、持つてゐた稽古着をいまくしげに抛り出しました。

『なんにもしはしないのだ』

と、二人の騒ぎを鎮めるやうに言つた、

『なんにもしはしないのだから、静かにしないか』

と、二人の後を追ひ廻して歩きました。

『静かにしないか。なんにもしはしないのだ。なんにもしはしないのだ』



と、お婆さんはねらひを定めるやうにじつと立ち止まりました。みどりと美佐男はお婆さんが立ち止つたのを見ると、漸く恐怖が薄らいたやうに歩みを止めました。おちけて後ひざりしながらお婆さんと支那人の氣配を見まもりました。するとお婆さんは支那人に眼配をして、お婆さんはみどりを、支那人は美佐男を逃げ出す暇もなく鷲掴みに引つかまへました。

みどりと美佐男とはまた火がついたやうにけたましく泣き叫びました。お婆さんと支那人は慌てて二人の口を抑へました。抑へられた手の下からは苦しげな泣き聲が洩れました。けれども、お婆さんはみどりを小腋に抱えて、容赦なく座敷の奥へつれて行きました。支那人は美佐男を膝の下へふまへて、むごたたらしく美佐男の腕をねち上げました。美佐男は奥へつれられて行つたみどりを心配して、支那人の手から逃げ出さうとしました。口を抑へられた手の下から纖弱く泣き叫んで、力を限りに支那人と争ひました。けれども、其の時には



もうみどりは家の奥の座敷の牢へ押籠められて終ひました。みどりと美佐男の間はもう座敷の牢の重い板戸に距てられて終ひました。

その時、美佐男はどんなに思ひやりの深い狂燥をしたでせう。美佐男とみどりの間を永久に距てて終ふやうな重い板戸の閉ぢられる音を聞いて、始めて支那人が美佐男の體を自由にさせた時、美佐男はどんなに氣づかはしげな様子を、慌ただしく座敷の奥へ驅けて行つたでせう。そして、開けても開けてももう何うしても開けることの出来ない重い板戸の前を、どんなに怨めしげにうろくとうろつき廻つたでせう。其處にはもうみどりの姿を覗き得る少しの隙間さへもありませんでした。重い板戸は鐵の扉のやうに冷やかに立つてゐました。中からは絶え入るやうにすすり泣くみどりの聲と、身を刺すやうなとげとげしいお婆さんの聲とが、幽かに地獄の底から響いて來るやうに聞えました。美佐男はもうじつとして居られなくなりました。地團駄を踏んでがりくと重い板



戸を搔き廻りました。お婆さんや支那人の恐ろしさも忘れて、ばたくと重い板戸を打ち叩きました。けれども、其の板戸にはもう嚴重な鍵が下してありません。美佐男の入つて行くことを許さないやうにしてありました。

八

お婆さんは平氣で其の音を聞き濟まして、

『黙らないか。いい加減で黙らないか』

と、みどりを自分の前に引き据えて折檻を續けました。

『もう黙りな。もう、いい加減に黙りな』

と、お婆さんは氣を腐らしたやうに言つた、若し黙らなければ手荒な打擲をし兼ねないやうな權幕を見せました。その權幕におぢ氣づいたやうに、聲を抑へてしやくい泣くみどりの様子を見ながら、



『お前は何うしてそんなにわたし達の言ふことを聞かないのだ。え、何うしてそんなにびく／＼してゐるのだ』
と、苛立たしげな様子をして、

『お前にはわたし達の言ふことが解らないのか。わたし達があればほどに話して聞かせても、お前にはまだ家の蛇が怖いのか。え、お前は何うしてそんなに蛇を怖がる。怖くない蛇を何うしてそんなに怖がる。お前がそんなに蛇を怖がつてゐるなら、わたし達はお前をもつと酷ひ目に會はせてやる。もつと酷ひ目に會はして殺して終ふかも知れない。何うだ。それが厭なら蛇と仲よくするやうな氣持になりな。わたし達の言ふことを聞いて蛇の檻へ行つて見な何うだ。え、何うだ。言ふことを聞くか。言ふことを聞いて蛇の檻へ行か』
と、恐ろしい手詰の話をしました。

もうけれども、蛇と言ふ言葉にも憎えるみどりは、肩をすぼめてしやくり上げ



ながらお婆さんの顔を見上げたまま、なんと答へをすることも出来ないのです。

お婆さんは聲を荒げました。

『なせそんな顔をしてゐるのだ。お前はなせ黙つてゐるのだ』
と、みどりの纖弱い腕を掴んで揺り動かしながら、

『わたし達の言ふことを聞くか。え、わたし達の言ふことを聞いて蛇の檻へ行か』
と、邪険に顔を覗き込みました。

みどりはまた聲を高めて泣きました。

『厭だと言ふのだな。お前は何うしても厭だと言ふのだな。それではお前の勝手だ』

お婆さんは夜叉のやうになりました。



『その代りお前は此處へ入れて置く。此處へ入れて置いてもう御飯を食べさせない。わたし達の言ふことを聞くまで、何時までも此處へ入れて置く。わたし達の言ふことを聞いて蛇の檻へ行くまで、何時までも此處へ入れて置いて御飯を食べさせない』

と、お婆さんはわざと意地悪く言つた。

『そら。その中にはお前の後の方から蛇が這ひ出して来る』

と、みどりを威かして言ひました。

みどりは慌てて飛び上つて

『お婆さん』

と、いきなりお婆さんに取り縋らうとしました。

けれども、お婆さんは管なくみどりを押し除けました。

『馬鹿、蛇に咬み殺される』



と、板敷の上へみどりを突き倒して、重い板戸にかちりと鍵を入れました。

みどりは突き倒れたまま聲を上げて泣き出しました。その泣き聲は美佐男を氣狂にする程痛々しく響きました。板戸の前へうろくして、はらくくと氣を揉みながら中の氣配を窺がつてゐた美佐男は、急込む呼吸をはずませて板戸の表を掻き穿りました。その時、板戸は手荒に押開かれて、

『何をする』

と、罵る聲と共に、中からはお婆さんが出て來ました。

美佐男は板戸の開かれた隙間からいきなり中へ飛び込もうとしました。けれども、お婆さんは直にビシやりと板戸を引いて、外側から鍵をかけて終ひました。

『何をうろくしてゐるのだ。中へ入れたら入つて見な』

と、美佐男に棄て臺詞を残して、その儘茶の間へ引返して行きました。

後にはうろ／＼とたまらなくしやくり泣く美佐男が残りしました。板戸の奥からは絶え絶えに泣くみどりの泣き聲が聞えました。

九

何時までうろ／＼してゐても、もう何うしても其處から入ることが出来なかつた時、美佐男は急に何事か思ひついたやうに、いきなり其處を立ち去つて行きました。直ぐ次ぎの隣間には座敷の牢に唯だ一つしかない小さな窓の下に、人眼を偷んで忍び寄つた美佐男の姿がありました。

『みどちゃん』

と、美佐男は窓の下に近づいて小聲にみどりを呼びました。

『みどちゃん。みどちゃん』

と、うろ／＼しながら続けさまに呼びました。けれども、その聲がひつそりし

た其の裏庭の中に消えて行つた後には、なんの應える聲もありませんでした。その小さい窓は永久に長い沈黙を續けてゐるやうに、氣を揉んでゐるいぢらし美佐男の姿を、たゞ黙つて見下して居ました。窓に篋められてある小さいガラス戸は息を引取つた死人の顔を見るやうに、青ざめた冷めたい色に光つてゐました。

『みどちゃん。みどちゃん』

と、美佐男は涙聲になつて呼び續けました。けれども、窓は永久に沈黙を續け、窓ガラスは永久に冷たい色をさしてゐました。美佐男はもう氣が氣でならないやうな様子をして、

『みどちゃん。みどちゃん』

と、呼びながら小さい拳でコツ／＼と窓の下を叩きました。するとその時、座敷牢の中に正體なく泣き沈んでゐたみどりは、びつくりした



やうに顔を上げました、窓ガラス一枚を距てて幽かに達いて行つた美佐男の聲は、みどりの耳に懐かしい母の聲を聞いたやうに響きました。何もかも打ち忘れて慌てて身を起しました。早鐘を打つやうに胸を躍らせながら、いきなり窓の所へ顔を出しました。

『あ、みどちゃん』

と、美佐男は直にみどりの姿を認めて、窓の下から聲をかけました。

『あゝ、美佐ちゃん』

と、窓の中からはみどりの聲が續きました。

『みどちゃん』

『美佐ちゃん』

『君。開かないの。其處は開かないの』

美佐男は何よりも先にかう言ひました。みどりは聲に應じてガラス戸を押開け



ました。けれども、それは唯だ二三寸開いた許りで、みどりがいくら力をこめてこぢ開けても、もうそれから先へは開ませんでした。

『開かないの。もつと開かないの』

と、美佐男は下から急ぎ込んで言ひました。

みどりは困つて終つたやうな様子をして、戸を開ける手を止めて終ひました。

すると、美佐男はふとその間近に轉がしてあつた丸木の切れ端に眼をとめて、いきなり窓の下へ轉がして來ました。それを踏み臺にして窓の前に立ち上りました。窓に手をかけてがたくとガラス戸を揺り動かしました。けれども、それきり聞かないやうに出來てゐるガラス戸は、美佐男がいくら力をこめてこぢ開けても、もう何うしても開けることが出來ませんでした。

美佐男は更にガラス戸を取り外さうとしました。けれども、矢つ張ガラス戸は取り外すことが出來ませんでした。



二人はもう何うしていいか解らなくなつたやうに、それきり戸を開けることを止めました。美佐男はその少しの隙間から手を差入れて、

『みどりちゃん』

と、悲しげにみどりの手をとりました。みどりもまた美佐男の手を握つて、

『美佐ちゃん』

と、悲しげに美佐男の顔を見つめました。美佐男はもうみどりと自分とが哀れで堪らないやうな様子をして、

『何うしようかね、君』

と、今にも聲をあげて泣き出しさうに言ひました。

『君、何處か他に出られるやうな所はないの』

と、きよろくとその隙間から中を覗き込んで見ました。みどりもきよろくと座敷の牢の隅々を見廻して、今にも聲を上げて泣き出しさうな眼付をしまし



た。

『なんにもないの。え、君』

『ええ』

『中はどんなの』

『真つ暗なの』

『真つ暗なの？』

『ええ。冷たい板の間なの』

『板の間なの？疊ぢやないの』

と、美佐男は思ひやりの深い眼付をして言ひました。

十

『ねえ、美佐ちゃん』



と、みどりは急に一大事**にぶつかつたやうな顔付をして、**

『此處が蛇がゐるの』

と、寒氣立つたやうな様子やうすをしながら聞ききました。之れを聞くと美佐男は急に眼を丸くして、

『何うしてなの』

と、言葉忙しく聞き返しました。

『お婆さんがさう言つたの』

『此處に蛇がゐるつて言つたの？』

と、美佐男は顔の色を動かしました。

『お婆さんがこんな事を言つたの？』

『ええ、いまに蛇が出て來るつて』

『ほんとにお婆さんがさう言つたの』



『ええ、蛇に咬み殺されるつて』

『咬み殺されるつて言つたの？』

と、美佐男はびつくりしたやうに言ひました。けれども直に**怜悯な眼付をして、**

『そんなことはないよ。そんなことなんかありやしないんだよ』

と、みどりに安心をさせるやうに言ひました。

『君はお婆さんに威されたんだよ。僕はお婆さんがきつと君を威かしたんだと』

思ふよ。だつて、君、此處の家には青の他に蛇なんかゐやしないんだもの。

臺灣にはハブと言ふ蛇がゐるつて言ふけれど、此處の家にはあの青の他には

なんにも蛇なんてゐやしないんだもの』

『それぢや、此處にはゐやしないの』

『さうさ。ゐやしないんだよ。あのお婆さんはいけないお婆さんだから、きつ

と嘘を言つたんだよ』

『それぢや嘘なの』

『きつとさうだと思ふよ。だからそんなに心配なんかしなくつてもいいんだよ。僕は君がそんなことを心配してゐるのはつまらないことだと思ふよ』

と、みどりの氣を取らすやうにわざと元氣よく言ひました。

『それならいいけれど』

と、みどりは安心したやうに見えました。

『ほんとに心配なんかしなくつてもいいんだよ。ね、君、だから心配するのはよし給へ。心配なんかするのよし給へ』

と、美佐男は確に間違のない事のやうに言ひました。けれども、ひんやりとする冷たい座敷牢の中の、何處かに蛇が潜んでゐはすまいかと思はれるやうな底氣味の悪い暗がりを見やると、何となく心許ないやうな心持になりました。心配げに中を覗いて見ました。するとその時、遠く二人の耳に、

『美佐男。美佐男』

と、美佐男を呼び立てるお婆さんの聲が聞えました。

『お婆さんの聲だ』

『あ、お婆さん』

二人は眼を輝かして耳を濟ました。

『美佐男。美佐男。美佐男』

と、お婆さんの呼び立てる聲は次第にはつきりと聞えて來ました。

『此處へ來るんでせうか』

『ウン。來るかも知れないね』

と、二人は急におどくし始めました。

『君、來るといけないから——見つかるといけないから、また後で來るよ。ね、又後で來るよ。少し待つてゐたまへ。直に來るからね』

と、美佐男は慌てて丸木から飛び下りて、その儘こそくと表口の方へ駆け出して行きました。

丁度その時、表口の方へ廻つて行つたお婆さんは、其處で行き合つた美佐男の姿を見ると、

『美佐男』

と、鋭く聲をかけました。探りを入れるやうにじろくと美佐男の顔を見つめて、

『お前は何處へ行つて居たんだ』

と、頭から噛み付くやうに言ひました。

美佐男は自分のしてゐたことを見付けられたやうな顔付をして、恐る／＼お婆さんの顔を偷み見ました。

『何處をのらくらしてゐるのだ。わたし達はのらくらさせて置くために、家へ

連れてあるのぢやない。今日はこれから小父さんがお前を汽車へ乗せて臺南へ連れて行くのだ。早く仕度をして小父さんと一緒に行くのだ』

お婆さんの言ふことは美佐男が内所で座敷牢の窓の下へ行つたことではありませんでした。美佐男はそれを聞くと安心したやうに思はれました。けれども、直にみどりの事を氣づかすには居られませんでした。自分が汽車に乗つて行つた後のみどりの事を氣づかすには居られませんでした。

『僕、汽車へなんか乗りたくないんですよ』

と、お婆さんにかう言はずには居られませんでした。するとお婆さんは心外なことを聞いたやうな顔付をして、

『馬鹿め。面白づくでお前を汽車へ乗せるのぢやない。今日はお前をつれて臺南へ行かなければならないことがあるのだ』

と、口を尖らせて言ひました。直に引つ立てて忙がはしく出發の仕度をさせま

した。美佐男は堪らなくみどりのことを心配しながら、支那人と一緒に臺南へ立つて行かなければなりませんでした。

十一

みどりの閉じ籠められた座敷の牢は薄暗い部屋でした。物悲しい部屋でした。けれども、みどりは此處で始めて静かな落着いた心持になることが出来ました。座敷牢の外にお婆さんや支那人と一緒にゐた時には、絶え間ない不安と、心痛と、恐怖とを感せずには居られませんでした。けれども、かうしてお婆さんから離れ、支那人から離れ、恐ろしい蛇の檻から離れて、全く隔離された此の入室の中に閉籠められてからは、何處となく静かな落着いた気分になることが出来ました。此の座敷牢の中が却つて安心してゐることが出来るやうな心持もしました。

ことに、窓の下へ来て自分の名を呼んだ美佐男の聲を、久し振りで懐かしい母から呼ばれたやうに感じた時から、みどりはまた懐かしい故郷の家を思ひ出して居りました。お婆さんや支那人と一緒に座敷牢の外にゐる間は、お婆さんや支那人の慘酷な言葉と折檻とに苦しめられて、戀しい故郷を思ひ浮べる餘裕もなく過ぎて来ました。けれども、久し振りで懐かしい母の聲を聞いたやうに思つた時から、みどりはまた、急に戀しい故郷のことや、戀しい父や母やのことなどが、湧き溢れるやうに思ひ出されて来ました。

その頃には、暑い臺灣の島には、もううら悲しい初秋が訪れて来ました。燃えるやうに輝いてゐた日の光にも、弱々しい影の漂ふ氣配が感せられ、黒ずんで来た野や山にも、強い西北の風が吹き渡つて来ました。土人達の口稗に神様が布を干してゐると言ひ傳へられてゐる中央山脈の雪は、早くも山の峯に白く光つて、打狗附近の一帶には空の陰蔭に掻き曇る降雨の時節が来ました。かゝ



る時、惱みない人の心にもなにはなしに地の底へ沈み行くやうな幽鬱の思ひが宿つて行き、かうした境遇にかうした苦痛をなめてゐるみどりの心には、遣る瀬ない郷愁の思ひが湧いて行きました。みどりはかうして青ざめたやうなほの暗い座敷牢の中に、唯だ一人恣に黙想することの出来る自由を得た時、どんなにしみじくと深い物思ひに耽りながら、しよんぼりと窓の外を眺めてゐた時、どんなに懐かしく父や母の想ふ悲しい涙が溢れて行つたでせう。

その座敷牢の窓は打狗港内の海を見下す高い位置にありました。雨をもつ雲のどんよりと低く垂れ込めてゐる物悲しい空の下には、出て行く船と入つて来る船とが幾艘となく数多く眺められました。そして、その多くの船の中の、煙を洩らして遠く港の外へ出て行く大きい船の姿はゆくりなくみどりをして矢のやうに故郷へ歸りたい望郷の思ひを抱かしました。若しその時、みどりは自分



と一緒に優しい美佐男がゐるならば、

『あの船は何處へ行くの』

と、その船の行衛を美佐男に尋ねたに相違ないでせう。また理解の力の充分でない幼少の小娘の心には、曾て自分が北の國の港から運ばれて来た長い船路の記憶をたどつても、それはぼんやりとして夢の中の出来事のやうに思はれる許りでした。けれども、臆氣にその船の行衛を想像して、

『あの船はあたしの家の方へ行くぢやないの』

と、その船の行く先を美佐男に尋ねたに相違ないでせう。

『そして、あの船へ乗れば家へ歸つて行くことが出来るんぢやないの』

『きつとさうに違ひない。あの船へ乗ればきつとお家へ歸ることが出来るに違ひない。さうでせう。ねえ、さうでせう』



と、始めてその時大きい発見をしたやうに、急に生々と活氣がつきながら尋ねたに相違ないでせう。

みどりがかう言ふことを感じたのはこれが始めてのことでありました。かう言ふことを感ずると同時に、何うしたらば此の家を逃げ出すことが出来るだらうと思つたのも此の時が始めてのことでありました。すると、そのとき、何う言ふ風にしたらばお婆さんや支那人の眼をかすめて、此處の家を出て行くことが出来るか、何う言ふ風にしたらばあの船の出る所へ行つて、家の方へ行く船に乗り込むことが出来るか、また、何處から何處を通つて船の所へ行くことが出来るのか、なんと言つて家の方へ行く船に乗り込むのか、かうしたいいろ／＼のことがそれからそれへとみどりの心にいとけない研究を始めさせました。

十二

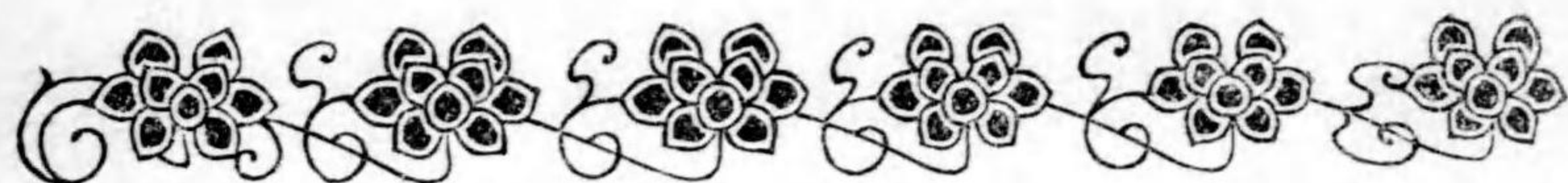


けれども、一度自分の現在の境遇に思ひ及んで、座敷の牢の中に閉ぢ込められてゐる今の身の有様を見返した時には、みどりは忽ち大空から地上に投げ落されたやうな悲しい絶望の中に沈められて終ひました。もし蛇の友達になるやうな心持になるまでは、座敷の牢から出さないと言つたお婆さんの言葉が、本統のお婆さんの心から出たものであるならば、蛇の嫌ひな自分はこれから先何う言ふ風にしたらいいか、何時になつたらば此の座敷牢の外へ出して貰ふことが出来るか、かうした現在の自分の身のうへを考へて見ると、みどりは眞つ暗な闇の中から眞つ暗の闇の中を迷ひ歩いてゐるやうな果ての見えない悲しい絶望の中に沈められて終ひました。港を出て行く船に乗れば必ず家へ歸ることが出来るに相違ないと信じた時には、急に父や母の所へ行くことが出来るやうになつたかのやうに、心はうき／＼と浮き立つて來ました。けれども、一度空想から覺めて現在の自分の身の上を思つて見れば、自分はもう何うしてものが



れることの出来ないお婆さんや支那人の手に捉へられてゐるのでした。お婆さんや支那人から嫌ひな蛇の蛇使ひになることを強ひられて、もう何處からも出ることの出来ない座敷の牢に閉じ籠められてゐるのでした。座敷の牢に閉じ籠められて、何時食事を與へられるとも、何時廣い明るい所へ出して貰へることも、もう先の解らないみじめな身の上になつてゐるのでした。

その時、みどりの眼からは潜然として悔恨の涙が溢れて來ました。曾て故郷に遠い南の國の臺灣に憬れて、その南の國の臺灣の美しい幻を描いてゐた空想の少女は、今、その憬れてゐた南の國の臺灣から懐かしい故郷の父母を想ふ郷愁の少女でありました。思へばみどりがもつてゐた美しい空想の世界は、如何程に無慘に破られて來たでありませう。そして、空想に耽つてゐた時の南の國の臺灣の美しさに反して、眼に見る實際の南の國の臺灣は、如何に無慘にみどりの描いてゐた幻の世界を破つたでせう。どみりの空想してゐた臺灣はこんな無



慘な世界ではないのでした。もつとく美しく華やかな世界でした。みどりの憬れてゐた燕の飛んで行く遠い南の國は、こんな無慘な世界ではないのでした。もつともつと楽しく嬉しい世界でした。大きな美しい海のある世界で、古い綿繪の名高い繪師の筆になつた名所繪圖に見るやうな世界で、そして其處には美しい眞つ赤な花が咲き、其處の國の少女はその花の滴で白粉や紅を溶く世界でした。かうしてお婆さんや支那人から非道な虐待を受けるやうな、身の毛のよだつほど嫌ひな蛇の蛇使ひを強ひられるやうな、そして、座敷の牢に閉ぢ籠められて食べるものも食べさせられないやうな世界ではなかつたのでした。

『母さん』

と、みどりはわれと我身につまされて母を呼びました。

『母さん。母さん』

と、込み上げて來る涙と共に我を忘れて母を呼びました。

やがて、その日も空は灰色に掻き曇つたまま暮れて行きました。暗い座敷牢の中には早くも物悲しい夕闇は這ひ纏つて行きました。そして、茶の間には夕食の膳の取り片附けられた時が来ても、お婆さんは本統にみどりを夕食の膳に呼ばなへのでした。次第に夜の深くなつた眞つ暗な座敷牢の中に、次第に迫つて来るうすら寒い夜氣に顫えながら、しくしくとすすり泣いてゐる一人ぼつちのみどり、漆のやうに黒い夜の闇に摺えて、こらへてゐるこれが出來なくなつたやうに入口の板戸をけたましくも叩いたけれど、お婆さんは本統にみどりを座敷牢の中から出してくれないのでした。

十三

その翌る日の午後、臺南から戻つて來ると直に、座敷牢の窓の下へ駆け行つた美佐男が、窓の隙間から座敷牢の中を覗き込んで、其處に昨日のままそのま

まに閉ぢ籠められてゐるみどりの、ぐつたりと疲れ果てて死人のやうに正體なく板敷の上に打ち倒れてゐる無慘な姿を見て、其の小さい胸を譬へやうのない驚きと悲しみと同情とを跳らせた時、茶の間では支那人がお婆さんと火鉢を挟んで坐つて居ました。

『あの子は何うしたね』

と、支那人は何よりも先にみどりの事を尋ねました。血のやうな赤い酒を飲んで汽車の勞れを休めながら、

『少しは利き目があつたかね』

と、剛愎を眼をして言ひました。

『まだ昨日の儘さ。だが、ちつとは利き目があつたやうだ』

と、お婆さんは支那人の酒の相手をしながら、

『昨日からずつと泣き通しさ。今ひとしきり泣かせてやつたのさ』



と、惨忍な眼をして言ひました。

『それぢやあ、まだ入れてあるんだね』

『ああ、さうなのさ、もうそろ／＼薬が廻つて來たらしい。昨日もひとしきりやかましく戸を叩いて、出してくれ出してくれと騒いだが、わたしは何うしても出してやらなかつた。終ひには泣き勞れてある板の間に倒れて終つたやうだつた。だが、わたしはわざとあの板の間で一晩夜を明かさせた。それが確に身に沁みたらしいのさ』

と、お婆さんは自慢げに言つて、

『そして、御飯も昨日からすつとやらすにあるのさ』

と、氣味の悪い薄笑ひを洩らしました。

『すつと』

と、流石に支那人も眼を睨りました。



『さうさ、まだ一度もやらないのさ。子供にはこれが一番の攻め道具と言ふものだ。一日や二日は食べさせずに置いても決して死ぬやうな氣遣ひはないから、わたしはもう少し食べさせずに置いてやらうと思ふのさ』

『大丈夫かね』

『御心配は御無用さ』

と、お婆さんは調子づいたやうに言つて、

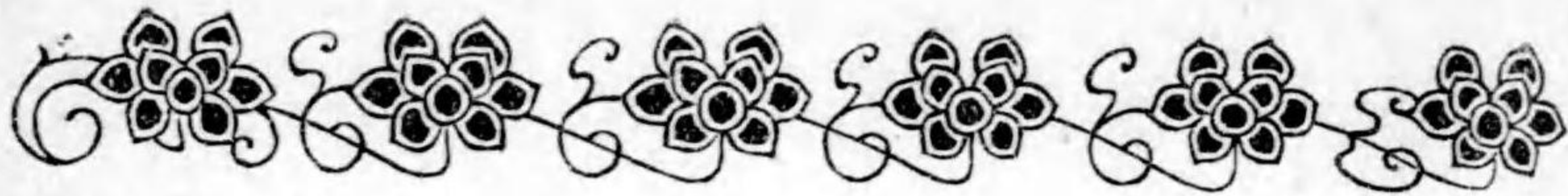
『わしは今あの子の所へ行つて見たが、ピンピンしたものさ。その時わしはわざと握り飯を持つて行つて、あの子に見せびらかしてやつた。何うだ、欲しいか、欲しけりやくれてやらうと言つてやつた。すると、あの子は物ほしさうにいきなり手を出したぢやないか。其處でわたしはかう言つてやつたのだ。』
『馬鹿。お氣の毒だよと。な。そして、その握り飯をわしの口へ入れて見せたのさ。あの子ももう堪らないと見えてな。それからわたしは食ひかけた半』



分の奴をあの子の眼の前に突き出して、さあぐれてやると言ふと、あの子はそんなにされてもまだ食べたさうに手を出したぢやないか。言ふまでもないがわたしはそれもあの子には食べさせなかつた。わたしは食べたさうに出したあの子の手をピジャリと叩いて、お前には平手をやる。此の握り飯はかう言ふ風にわたしの口へ入れるのさと、あの子の眼の前でその半分も甘さうに食べて見せたのさ。するとお前さん。あの子が何うしたと思ふかね。指をくはへて食べたさうに見てゐたぢやないか。もう占めたものだ。お前さん、見て居な。今夜はわしがきつと言ふことを聞かせて見せるから。お前さんに文句を言はれないやうにさ。はつはつは。あの子をウンと言はせれば、もうわたしは威張つたものさ。お前さんなんぞに愚圖々々とは言せて置かないよ』と、いい氣になつてべら〜と述べ立てました。

十四

『それはさうと、お前さんの方は何うしたな。臺南の話は』
『うまく纏つた。大變うまく』
『どんな話が出来たのだな』
『今。臺南へ来てゐるのは、西洋の曲馬大一座と言ふのさ』
『それぢや曲馬ばかりなのかな』
『さうだ。西洋の曲馬許りさ』
『それぢやあ。お前さん。その大一座と合同して興行をするのなら、此方は大威張ぢやないか。此方には獅子がある。蛇がある。獅子にはあの綺麗な女だ。蛇にはあの可愛い女の子だ。餘つ程割前を多く取らなければ合はない』
『それはさうだ。だが、割前の半前宛で我慢をすることにして來たのだ。それ





でなくつてはむかふが承知をしないからな。そして、むかふでは大變に急いでゐる』

と支那人は困つた事のやうに言ひました。

『そんなに急いでゐるかな』

と、お婆さんは當惑したやうに言ひました。けれども直に飲みさしの赤い酒を飲み干して、

『だが、いい。むかふが急いでゐるのなら此方も急ぐまでだ。女はあの通りだ。獅子の方はもう譯なく仕込むことが出来る。あの子もあの通りだ。蛇の方ももう譯なく仕込むことが出来る。若し兩方とも捗々しく行かない時には、仕込みはいい加減にして早く出掛けて行くまでだ。さうだ。そして大勢の見物人の前でわざと獅子を怒らせる。あの女が獅子と一緒に見物人の前に出た時、頭を計つて獅子を怒らせる。さうすると、獅子はきつとあの女に飛び付いて



行くに相違ない。あの女に飛び付いて足の下にあの女を踏まへるに相違ない。その時、お前さんは見物人が何うすると思ふかな。あの綺麗な女が獅子に爪を立てられて、眞白な肌からたら〜と赤い血を流すのを見ると、見物人は何うなることかと思ふに相違ないのだよ。手に汗を握るに相違ないのだよ。そして、女が獅子に踏み殺されるのを見ると、其は臺灣一ぱんの評判になる。其處だ、其處がわたしのねらつてゐる所だ。さうした時にはわたしは直に新しい女を探してくる。そして今度は其の時よりも華々しく興行を打つ。すると見物人は山のやうに入つて来る。金は厭と言ふ程儲つて行く。何だ。お前さん、ざつとまあ、こんなものさ』

と、得意になつて話しました。

『これはいい考へだ』

と、支那人も感心して黙頭きました。



『そして、お前さん。美佐男の方は何うだつたな』
 『それもうまく行つた』
 『うまく行つたのかな。それぢや美佐男で役に立つかな』
 『丁度あの子にいいことがあつたのさ』
 『さうかい。何もかもトン／＼拍子だ』
 『今度は運が向いて来たやうだ』
 『ねえ、お前さん。前祝に一杯』
 『さうだな。一杯やるかな』
 『お前さん。何かお奢りな』
 『又たわしかい』
 『いいぢやないか。四つ足を一斤』

十五

かうしたお婆さんと支那人との前祝の酒盛を始め、氣樂さに引換へて、座敷牢の内と外とは如何に痛ましい哀れな光景が演じられてゐたでせう。赤い酒と四つ足の一斤とに惨酷な祝福をするお婆さんや支那人の振舞に引き換えて、死人のやうに正體なく打倒れてゐて無慘なみどりの姿を見た時、美佐男は如何に思ひやりの深い驚きの眼を睜つたでせう。無理に臺南へ連れられて行つた昨日の出發間際にも、臺南の見知らぬ家に一夜を過したその間にも、自分の居なくなつた後のみどりが何うなつたかと思ふ他には、何を思ふことも何を見る氣も起らなかつたほど、みどりの身の上を氣づかつてゐた美佐男は、かうして昨日のまゝ其のままに座敷牢の中に入れられてゐるみどりの姿を見た時、どんなに胸を跳らせて思ひやりと深い驚きの眼を睜つたでせう。その時、美佐男の心に





は不意に恐ろしい死の思ひが閃めきました。どつたりと板敷の上に打ち倒れて身動きもすることのない、無惨なみどりの姿を見ると、美佐男は直にみどりが死んでゐるのではないかと思ひました。お婆さんや支那人の眼を偷んでこつそりと忍んで来たことも、お婆さんや支那人に知れるやうな大きい聲を出してはいけないと言ふことも、もう何もかも忘れて、

『みどちゃん』

と、いきなり大きい聲を出さずにはゐられませんでした。

『君。みどちゃん。みどちゃん』

と、心を取り亂してけたたましく大きい聲を出さずには居られませんでした。

けれども、氣の遠くなつてゐたその時のみどりの耳には、その懐かしい美佐男の聲も聞き取ることが出来ませんでした。

『君。君。僕だよ。僕だよ。みどちゃん。みどちゃん』



と、聲を張り上げて呼び続ける美佐男の聲に心付いて、みどりが力なく頭を擡げて四邊を見たのは、それから直のことではありませんでした。夢とも現とも分らないやうに喪心したみどりの耳には、けたたましく呼び続ける美佐男の聲も幽かに遠い地の底の聲を聞くやうに聞える許りで、容易にそれを美佐男の聲と氣づくことも出来ずに、苦しい呻き聲を洩らしながら僅かに手足を動かしただけでした。美佐男がなほ操り返して呼び続けると、始めて四邊を見廻した眼を美佐男の方へ向けたのでした。

『君、何うしたの。何うしたの』

と美佐男は窓の隙間から中を覗込んで言ふて、始めてみどりはそれが美佐男であることを知つたのでした。

けれども、まだはつきりと物を見分けることが出来ないやうな顔付をして、『美佐ちゃんなの』



と、ぼんやりと美佐男を見ながら言ひました。其の聲は消入るやうな弱々しく聞えました。

『みどりちゃん。何うしたの。え、君。まだ昨日から入れられてゐるの』
と、美佐男が急ぎ込みながら言ひました。

みどりにはまだそれがはつきりと耳へ入らないやうに見えました。

『あたし、何うしたんでせうね』

と、漸く氣が付いて來たやうに、さよろきよると自分の周圍を見廻して、

『あなた、美佐ちゃんなのね、美佐ちゃんなのね』

と、嚙言のやうに言ひました。

『僕だよ。僕なんだよ。君、何うしたの。僕なんだよ』

と、美佐男は言葉忙しく言ひました。みどりは其の時始めて弱々しく立ち上つて、窓の傍へ近づいて行きましました。



十六

美佐男は其の時始めて四邊を憚らなければならぬ事に氣が付きましました。

『何うしたの、君。え、君。何うしたの。君は昨日から入れられたままなの』

と、囁くやうに聲をひそめて言ひました。

『ええ』

と、みどりは訴へるやうに答へました。

『昨日から入れたまゝなの？』

『ええ』

『それぢや昨日入れられたきり、昨夜も出して貰へなかつたの』

『ええ、ええ』

『それぢや、昨夜は此の中にゐたの』



『ええ、朝まで坐つて』

『朝まで坐つてゐたの。君は一晩中此の中に坐つてゐたの』
と、美佐男は思ひがけない大事を耳にしたやうに、

『そんなにされてゐたの。君はそんなに非道いことをされてゐたの』
と、直に涙ぐんで悲しうにみどりの顔を見つめました。

美佐男の驚きはそれ許りではありませんでした。かうして立つてゐるにも堪へないほど、弱々しく窓に絶つてゐるみどりが、

『ねえ、美佐ちゃん』

と、憫みを求めるやうな沈んだ様子をして、

『あたし、何か食べたいの。昨日からなんにも食べないから』

と、涙ぐんで言ひました。すると、美佐男は生れて始めての思ひがけない大事を耳にしたやうな顔付をしました。



『昨日からなんにも食べなかつたの』

と、みどりが可哀さうでたまらなさうに言ひました。

『君は昨日からなんにも食べなかつたの。それぢや、昨日から御飯も食べなかつたの』

『ええ、一度も』

『一度も食べなかつたの』

『昨夜も。今朝も』

『昨夜も今朝も食べなかつたの』

『まだお晝の御飯も』

『お晝の御飯も食べなかつたの』

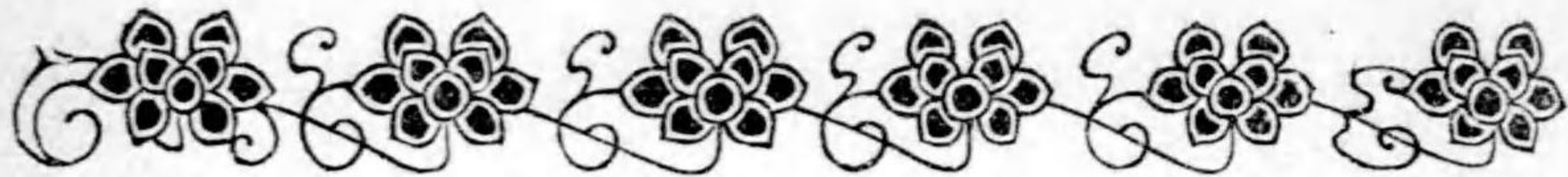
と、美佐男はみどりの一言一言に眼を丸くして、

『君は非道い目に會つてゐたのね。昨日から此の中へ入れられたきり、御飯も』



食べさせずに置かれたのね』
と、悲しく咽び泣くやうに聲を沈ませました。眼の中には今にも溢れるやうに涙を一ばい溜めて、

『僕は君のことが心配になつて、君の事許り心配してゐたんだよ。お婆さんが何うしても行けと言ふから、昨日は小父さんにつれられて他所の家へ泊つて来たけれど、僕は君が何うしてゐるだらうと思ふと、昨夜なんか何時までも眠ることが出来なかつたんだよ。でも、僕は君がこんなに非道い目に會ひはしないだらうと思つてゐたんだよ。お婆さんが本統に何時までも此の中へ入れて、こんなに御飯も食べさせずに置くとは思つて居なかつたんだよ。君がこんなに非道い目に會ふことが解つてゐれば、僕はいくらお婆さんや小父さんに叱られても、他所へなんて行きはしなかつたんだけれど』
と、みどりに言ひ譯をするやうな調子で言ひました。殊に、みどりが絶食の折



檻をされて居たことを思ふとたまらなく氣づかはしげな様子をして、

『それぢや、君はほんとにお腹が空いたらうね』

と、思ひやりの深い調子で言ひました。

みどりはそれには答へずに、

『ねえ、美佐ちゃん』

と、深く思ひ込んだやうに言ひました。

『ねえ、美佐ちゃん。此處の家の蛇は本統に怖かないの』

『何うしてなの』

『本統に此處の家の蛇は怖かないの』

『何うして君はそんなことを聞くの』

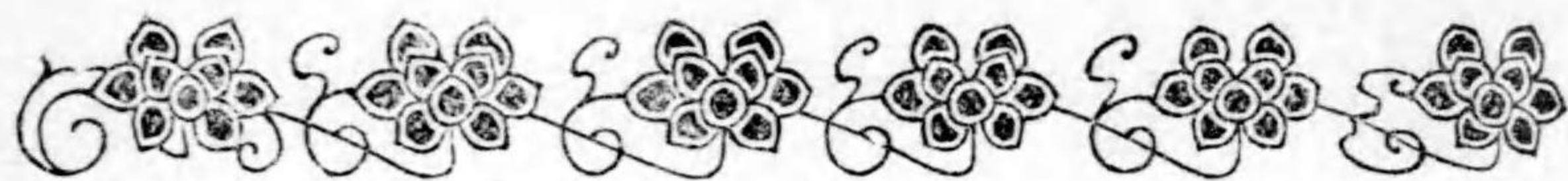


『だつて。あたし、お婆さんの言ふことを聞けば、此處を出して貰へるでせう。お婆さんの言ふことを聞いて、蛇のお友達になれば、此處を出して御飯も食べさせて貰へるでせう』

『お婆さんがさう言つたの』

『ええ。だから、あたし、本統に此處の蛇が怖くなければ、お婆さんの言ふこと聞いて、蛇使ひになつた方がいいと思つてますよ』

と、みどりはいぢらしく遣る瀬なげに言ひました。みどりはどんなに嫌ひな蛇であらうとも、どんなに恐ろしいお婆さんや支那人であらうとも、かうして座敷の牢に入れられたまゝ、二日も御飯を食べさせずに置かれるよりは、と思ひました。絶え間なく冷やかな眼を光らしてゐるお婆さんや支那人の言ふことを聞いても、また身の毛のよだつほど嫌ひな蛇の蛇使ひになつても、うすら寒い眞つ暗な夜を板の間に坐つて明かさなければならぬ



い座敷牢から出して貰ふことが出来、どんなものでもいいから早く御飯を食べさせて貰ふことが出来れば、いいと思ひました。

『さうすれば御飯を食べさせて貰へるんですもの』

と、みどりは遣る瀬なく悲しさにしかかも、もうあきらめを付けたやうに言ひました。

美佐男も又淺墓な子供心から、

『ウン、さうだね』

と、みどりの救はれる道が開けたやうに思ひました。

『さうすれば此の中から出して貰へるし、御飯も食べさせて貰へるね』
と、みどりの言葉に同意して言ひました。

『そりや、此處の蛇は本統に怖かないんだよ。どんなことをしたつてちつとも怖いことなんかありはしないんだよ』



と、さうした方がいいやうにも言ひました。

けれども、年に似合はない考への深い美佐男は、直にその言葉の後から、

『でも、君、もうほんとに怖がらない？』

と、心許なげに尋ねました。

『え、君、ほんとに大丈夫なの。また此の前のやうに蛇の檻の中へ行つて、體を悪くするやうなことはありやしないの』

『ええ。でも』

『又あんなことがあつて、若し君が死んで終ふと大變だね』

『でも、あたし、お腹が空いて仕方がないんですもの』

『何うしたらいいだらうな。何うしたらいいだらうな』

『早く何か食べたいんですもの』

『仕方がないな。みどちやん、それちや、蛇使ひになるの』



と、美佐男は何うしていいか解らなくなつて終ひました。

みどりも又悲しげに涙を浮べて、

『早く何か食べたい』

と、せがむやうに言ひました。

すると、美佐男はもう何もかも考へてゐる隙がなくなつたやうに、

『それちや、僕、お婆さんに頼んで見よう。ね、君。お婆さんに頼んで御飯を

食べるやうにして貰はう。ね』

『ええ、ええ』

『さうしよう、ね。僕がよく話をして、直に御飯を食べるやうにして貰はう』

と、美佐男は直に窓の前を離れて、急いで表の方へ走つて行きました。



美佐男は茶の間へ行きました。その時、茶の間ではお婆さんと支那人とが赤い酒をくみ交してゐました。ちやぶ臺の上には血の滴るやうな肉が並べられてありましたが火鉢にかけた鍋からはもかくと温かい湯氣が立ち登つて居ました。茶の間の中には食欲を誘ふやうな美味の匂ひが漂つてゐました。そして互に酌をし合ひながらうまさうに杯を干してゐるお婆さんと支那人の氣樂さ。無駄口を利きながらがつくと鍋の肉を食べてゐるお婆さんと支那人の心なさ。若し此の時、美佐男が物の道理を充分に辨へてゐるひとかどの大人であつたならば、同じ屋根の下には堪へ難いひもじさを訴へるみどりがあるのも關はずにかうして自分達二人だけ美酒と美味とに満足を買つてゐる有様を見て、どんなにその非道な振舞を憤つたか分らないでせう。

美佐男はお婆さんや支那人の顔を見たらば、直にみどりの哀れな有様を訴へようと思つたのでした。みどりのためにはどんな思ひを忍んでも、みどりを一刻



も早く座敷牢から出して、一刻も早く食事をする事が出来るように、お婆さんや支那人の憫みを求めようとしたのでした。けれども、茶の間の外からちらりとお婆さんや支那人の姿を見ると、美佐男は胸を突かれたやうに其處へ立ち止つて終ひました。殊に、美佐男の足音に氣のついたお婆さんと支那人がじろりと鋭い眼を美佐男に向けると、美佐男は咽頭が詰つて終つたやうに口へ出してなんにも言ふことが出来なくなりました。

『なんだ。お前はなにをそんな所に立つてゐるのだ』

とお婆さんは直に美佐男を詰りました。美佐男が怖々と肩をすばめて、敷居越しにお婆さんの顔を見てゐると、

『なにをそんな顔をしてゐるのだ。なにをそんな所に立つて、物欲しさうに見てゐるのだ。あつちへ行け』

と、口穢く叱言を言ひました。



美佐男は當てが外れたやうな氣がしました。がつかりしたやうな様子をして、すごとくとお婆さんや支那人の旁を離れて行きました。美佐男にはもう何うしていいか解らなくなりました。涙を浮べて餓を訴へた座敷牢の中のみどりを思ふと、もうじつとしてゐることが出来ないやうに氣は揉めながらも、お婆さんや支那人に何うしても思ひ切つて話し出すことが出来ないやうな、おちけた心持になつて終ひました。さうは思ひながらも又、思ひ切つてお婆さんや支那人に訴へなければ今にも、みどりの身に危うい出来事が湧きおこるやうに思はれて、小さい其の胸はもう一ぱいになつて終ひました。するとその時、美佐男の心にはふと跳り立つやうな思ひがけない考へが浮びました。いきなり呼び返されたやうに茶の間を見返して、其處からはもうお婆さんや支那人の姿が眼に入らないのを見ると、急にきよろ／＼と四邊を見廻しながら、こつそりと臺所の方へ忍んで行きました。



臺所には臺所の用事をしてゐる小母さんがゐました。その小母さんは美佐男の姿を見ると、

『何か用なの』

と、無造作に大きな聲を出して聞きました。

美佐男は腹の中を見抜かれたやうにギクリとしました。慌てて茶の間の方を見返しました。けれども、その時茶の間には氣樂さうに笑つてゐる支那人の聲が聞える許りで、お婆さんにも支那人にも小母さんの聲が聞えたやうな様子はありませんでした。美佐男は安心しました。安心して小母さんの顔を見つめました。小母さんは美佐男の様子を愛らしげに見て、

『何をキヨロ／＼してゐるの。つまみ食ひなんかしちやいけないよ』

と、氣輕に言ひました。美佐男には戯言に言つた小母さんの言葉が、胸に釘を打たれたやうに應へまし



た。小母さんは笑ひながら何處かへ出て行きました。美佐男は悪い事をする時のやうに躊躇しました。けれども、小母さんの姿が臺所から見えなくなつて行くとき、いきなり臺所の片隅にあるお鉢の蓋に手をかけたまま、茶の間の氣配と小母さんの足音に耳を聳てて、キヨロ／＼と四邊を見廻しました。更に其處此處と御飯を入れる器を探して歩きました。その時、小母さんの歸つて来る足音が聞えました。美佐男は弾ね返されたやうに慌ててお鉢の前を立ち上りました。

十九

小母さんはびつくりして自分の顔を見てゐる美佐男の姿に眼を留めました。「何うしたのさ、美佐ちゃん。そんなぼかんとした顔付をして」と、可笑しげに笑ひながら言ひました。

美佐男は顔の筋肉がゆるんで行きました。

「お前さんも可哀さうだね。いいお友達が座敷牢に入れられて終つてね。お前さん、寂しいの」

と、小母さんは美佐男の心を思ひやるやうな様子をしました。

美佐男は小母さんの様子に動かされたやうに見えました。不思議なものを見るやうな眼付をして、じつと穴の明くほど自分の顔を見てゐる美佐男の姿を見ながら、

「何うしたの。つまらないの」

と、小母さんが優しく尋ねると、

「小母さん」

と、美佐男は茶の間を氣にして聲をひそめながら、大事な秘密を話すやうな風と言ひました。





『ねえ、小母さん』

『なんだね、そんな聲なんかしてさ』

『小母さんはあの子が可哀さうだと思はない？』

『あの子のことかい』

『座敷牢の中へ入れられて、あの子が可愛さうだと思はない？』

『そりやあ、あたしは可哀さうだと思つてゐるよ』

『可哀さうだと思つてゐるの。小母さんはあの子が可哀さうだと思つてゐるの』

『あの子が可哀さうだと思つてゐる許りぢやないよ。あの子を庇つてやるために、お前さんまでが非道い目に會つてゐるのを見ると、わたしはお前さんが可哀さうな子だと思つてゐるよ』

と、小母さんがひそくと聲をひそめて言ふと、



『それぢやあ、小母さんは優しい人なの』

と、美佐男は不思議さうに言ひました。

『そりやあ、自分から優しいとも言へないけれど、わたしはお婆さんや支那人さんのやうに鬼のやうな心ではないんさ。わたしは何處へも行き所のない人間だから、仕方なしにかうやつてゐるんだけれど、お婆さんや支那人さんのすることは、わたしには可哀さうで見えてゐられないんさ。わたしはみんなに内所で、あの子の所へ御飯を持つて行つてやらうかとも思つたんだよ』

と、小母さんが茶の間に氣は配りながら囁くと、

『小母さんは御飯を持つて行つてやらうと思つたの？。それぢやあ、矢つ張僕のやうにあの子のことを心配して居たの』

と、美佐男は嬉しさに小母さんの傍へ摺り寄つて行きました。

『さうさ。わたしもお前さんのやうにあの子のことは心配してゐるんさ。けれ



ど、わたしがそんなことをして御覽。わたしがあの子の所へ御飯を持って行つたと言ふことが、お婆さんや支那人に知れて御覽。わたしは直に此處から追ひ出されなきやならないんだからね。その日からもう御飯が食べられなくなつて終ふんだからね』

『でも、小母さんは御飯を持って行つてやらうと思ふことだけは思つたの』
『そりやあ、腹の中だけではどんなに持つて行つてやりたいと思つてゐるか知れやしないんさ』

と、小母さんは心から可哀さうに思ふやうに言ふと、

『僕は小母さんと同じなんだよ』
と美佐男は頼母しい相談の相手が出来たやうな様子をして、

『ほんとのこと言ふと、僕は今御飯を持って行つてやらうと思つてゐたんだよ』



と、大事の秘密を打ち明けて終ひました。
小母さんはびつくりして眼を丸くしました。

二十

『それでは、お前さんはそれでお櫃の所に立つて居たんだね』

『ウム。さうなんだけれど』

『それぢやあもうあの子が昨日からなんにも食べさせられないことを知つてゐるの？』

『ウン。僕、心配だから今あの窓の所へ行つて見たんだよ』

『まあ、お前さんはさうだつたの。御飯を持って行つてやらうと思つたの』
『だつて、みどりちゃんが可哀さうなんだもの。お婆さんや小父さんに言へば叱られるし、持つて行つてやらなければみどりちゃんが可哀さうなんだもの』



『お前さんは本統に優しい子だね』

と、小母さんは可愛らしげに美佐男の顔を見つめて、

『いいから、持つて行つておやり。お婆さんに内所で持つて行つておやり』

と、更に茶の間の方へ眼を配つて、ひそくと小聲で言ひました。

『それぢや、小母さん。持つて行つていいの』

と、美佐男は思はず聲をはずませました。

『なんだね、そんな大きい聲を出してさ。静かにするんだよ。お婆さんや支那人さんに聞えたら、大變なことになるんぢやないか』

と、小母さんは美佐男の口を抑へました。

『いいかい。お婆さんや支那人さんには内所だよ。内所でこつそりと持つて行くんだよ。いいかい』

『ウン。ウン』



『それぢや、御飯を握つて鹽をつけてあげるからね。きつと内所で持つておいでよ』

小母さんは茶の間の様子を窺ひながら幾つかの握り飯を拵へてやりました。お婆さんや支那人の眼にとまらないやうに、美佐男を急ぎ立てて臺所口から出してやりました。

美佐男は嬉しさに踊り立つ心を抑へて、そつと四邊を見廻しながら臺所の外へ出ました。小母さんは新聞紙に包んだ握り飯の包みを抱えて、小走りに走つて行く美佐男の姿を見送りしました。直に美佐男の姿が其處から見えなくなると、小母さんは何氣ない顔をして用事に取りかかりました。美佐男はキヨロキヨロと後や先を見廻しながら、しつかりと蔭すやうに新聞の包を抱えて、座敷牢の窓の下へ忍び寄つて行きました。

その時、窓にはしよんぼりとみどりが立つて居ました。みどりは美佐男の忍び



寄つて行く姿を見ると、直に眼を輝かして新聞の包を見ました。美佐男もまた直にみどりの姿を認めて、

『みどちやん』

と、窓の前に立ちました。

『君、持つて来たよ。澤山持つて来たよ』

『美佐ちやん』

『さ、君、澤山だらう。ね、澤山だらう』

と、窓の隙間から入れると、

『ええ、有難う』

と、みどりはにつこりしながら受取りました、直に新聞の包を開いて、かぶりつくやうに食べ始めました。

『君、おいしいだらう、おいしいだらう』



『ええ』

『でも、君、お婆さんや小父さんには内所なんだよ』

『ええ、ええ』

『お婆さんや小父さんに知れると、臺所の小母さんが大變だから、お婆さんや小父さんには内所なんだよ』

『ええ、ええ。なに。今のはなんの話なの』

『君、聞いてゐなかつたの。いいから早く食べ給へ。後でゆつくり話さう、ね』

二十一

やがて、空はじめくと陰鬱な灰色に掻き曇つたまゝ、その日は咽ぶやうに悲しく暮れて行きました。暮れて行くほの暗い夕闇が次第に濃くなり、次第に深くなると共に、其處には恐ろしい不思議な秘密が潜んでゐるやうな夜が來ま



した。漆のやうに眞つ黒な、眼の痛くなるやうな眞つ黒な、呼吸の詰まるやうに眞つ黒な闇の中には、港の口に突き立つてゐる山を越えて、遠い海の中から泣き叫ぶやうな風が吹いて來ました。何故か此の夜に限つて、此の夜の恐ろしい闇に消えたやうに、そして、悲しい海の風に物狂ひしたやうに、檻の中の獅子はけたたましく叫び聲を擧げてゐました。

すると、その闇の中には幽霊のやうに動いて行く美しい女の姿がありました。その美しい髪は美しい額に亂れかかつてゐました。その美しい眼は赤く痛ましい亂心の血に濁つてゐました。その美しい顔はげつそりと見る影もなく面裏にして、噛み切つてその美しい唇からは、生々しい、血がたらりと垂れてゐました。

女はふらりと獅子の檻へ近づいて行きました。

その時、それと同時に、眞つ暗な座敷牢の中には、ほのかな薄暗い蠟燭の灯が



さして行きました。片手には蠟燭の灯の燈る燭臺を持ち、片手には美味な食物の並ぶ足高の膳をさげて座敷牢の中に立ら現はれた異様なお婆さんの姿と、異様なお婆さんの姿に、眼を睜つて、座敷牢の片隅に體をかがめてゐる可憐なみどりの姿とを、ほのかな薄暗い蠟燭の灯がぼんやりと照らして行きました。その灯に照らさらされて幾百もない白蛇のやうに見えるお婆さんの髪、毛の恐ろしさ。血に飢えて血を求めてゐる野生の獸のやうな鋭く輝いてゐるお婆さんの眼の恐ろしさ。みどりは蛇に見込まれたやうに居竦んで、その恐ろしい異様な姿に眸を凝らしました。

お婆さんの顔にはにやりと底氣味の悪い笑ひが浮びました。

『今夜はお前に御馳走してやる』

と、捧げてゐた膳をみどりの前に据えました。膳の上には幾通りかの美味の皿が並べて居ました。けれども、美味な皿と並んで、膳の上には水も滴るやうな



抜き身の短刀が置かれてありました。其の鋭い光。灯影を受けてキラ／＼と眼を射る物凄いな光。みどりは窒息する許りに息を殺して飛び立ち胸をきつく兩手に抑へながら怖々と、偷むやうにお婆さんの顔を見上げました。

すると、お婆さんは再び底氣味の悪い薄笑ひを洩らして、『そんなに怖さうな様子をしてゐるには及ばないのだよ』と、みどりの前に坐つて言ひました。

『さ、お膳の前へ坐りな』と、みどりの手をとつて膳の前へ坐らせました。

『わたしは今夜、お前がお腹を空かしてゐるだらうと思ふから、お前に御馳走を持つて来てやつたのだよ。御膳の上を見な。みんなうまいもの許りだ』

と、わざと御膳をみどりの前に突き付けて、『お膳の上には味のいい牛の肉がある。生々としたいきのいい魚の肉がある。』



それから、おいしい御飯が一杯と、おいしい腕盛が一杯。どうだな。お前はほしいと思はないかな』

と、わざといろ／＼の物を並べ立てて言ひました。みどりは不思議さうに眼を丸くして、膳の上とお婆さんの顔を見競べました。

『何うだ。ほしいかな。わたしはもうお前に晝間のやうなことをしようと言ふのぢやない。わたしはこれだけのものをお前に見せびらかして、わたしの口へ入れようと言ふのぢやない。わたしはこれだけのものを本統にお前にやる嘘を言はずにほんとに残らずお前に食べさせる』

と、言ひました。

けれども、みどりはなほ、お婆さんの顔と膳の上を見競べて、ものも言はずに呆氣にとられてゐました。なせお婆さんが急にこんなことを言ふやうになつたのか、なせ不意にこんなに澤山の御馳走を持つて来たのか、またなせ膳の上



抜き身の短刀が載せてあるのか、みどりにはそれが不気味な怖いことのやうに思はれて、なんと答へていいか解らないやうな顔付をしてゐました。

すると、お婆さんはまじく／＼とその様子を見つめて、
『お前は欲しくないのかな。お前はそんな顔をして、欲しいとは思はないかな』

と、訝がるやうに問ひつめました。

みどりはそれでも、まだ物欲しさうな様子は見せませんでした。

『お前はきつと晝間のことで懲りてゐるのだな、わたしが晝間あんな風にして見せたから、今夜もまたわたしが嘘を言ふと思つてゐるのだな。きつとお前はさう思つてゐるに違ひい。だが、わたしはもうお前に見せびらかすために此の御馳走を持つて來たのぢやない。本統にお前にやるためにもつて來たのだよ』



と、お婆さんは氣嫌をとるやうな調子で、

『何うだ。ほしければ食べな。え、欲しいけれら食べな。何うだな。食べるかな、食べたいと、食べたいと思ふかな』

と、無理に強ひるやうに言ひました。

けれども、みどりはなほ思ひ惑ひながら、

『ええ』

と、幽かに口の中で答へました。

二十二

お婆さんはにやりと薄笑ひを洩らしました。

『ほしいのだな。さうだらうとも、さうだらうとも。わたしももうお前はお腹が立つてゐるから、きつと飛び付くやうにして欲しがるだらうと思つてゐた』



んだ。食べな。みんな食べて終ひな』
と、何時になく優しい調子で言ひました。
けれども、物欲しさうな様子が見えて來たみどりの顔色を眺めながら、
『だが、お前もなんだらうな。こんなに澤山の御馳走を食べたら、その代りに
もうわたしの言ふことを聞くだらうな』
と、落付き濟まして聞きました。
みどりはそれを聞くと腫れ物にさわられたやうな様子をしました。お婆さんは
悠長に構へて、

『なにをそんなにびつくりしてゐるのだな。わたしはお前が此の御馳走を食べ
たら、その代りにもうわたしの言ふことを聞いて、蛇と仲よくするつもりだ
らうと思ふが、お前、何うだな。お前はもうわたしの言ふことを聞いて、蛇
と仲よくするつもりなんだらうな。え。蛇と仲よくするつもりなんだらう



な』
と、自分で決めて強ひました。

みどりはまた何も言ふことが出來なくなつて終ひました。

『お前はなせ黙つてゐるのだ。え、なせ返事をしないのだ。なにもそんな顔をし
てじろじろとわたしの顔を見てゐることはない。わたしの言ふことを聞い
て蛇と仲よくするつもりなら、お前はこんないろくの御馳走が食べられる
こないことはないさ。なんでもいことだからな』
と、お婆さんは貶すやうに言ひました。

『それとも、お前はまだ厭だと言ふのかな。え、まだ厭だと言ひ張るつもの
かな。それならわたしは御前に此の御馳走を食べさせはしないのだよ』
と、威し付けるやうにも言ひました。

『わたしはこれだけの御馳走を唯だでお前に食べさせるんぢやないのだ。わた



しの言ふことを聞いて蛇と仲よくするつもりなら食べさせると言ふのだ。何うだ。お前はわたしの言ふことを聞いて此の御馳走を食べるか。それともまだ強情を張り通して、蛇と仲よくするのは厭だと言ふのか。この御馳走を食べる氣にはならないと言ふのか』

と、強くそして柔かく言ひました。

みどりはなんと言つて答へていいか分りませんでした、かうして眼の前へ据えられたいろくの御馳走を見ては、みどりは飢えてゐる物欲しい子供心からつひれそを食べたいと思ひました。殊に、美佐男がひそかに握り飯を運んで来てくれた前の絶食に苦しめられてゐた時のみどりであつたならば、厭でもお婆さんの言ふことを聞いてたまらない、飢の爲めには、後の事を考へる暇もなく、即座に御馳走を食べたに相違なかつたらう。けれども、此の時のみどりは、もう美佐男の救ひを得てゐました。美佐男が運んで来てくれた幾つかの握り飯に



よつて、もう食欲は充分に満たされてゐました。又、其の事から此の時のみどりは胸に秘密をもつてゐる少女でした。美佐男が言ひ置いて行つたことを思ひ浮べると、みどりはきつぱりとお婆さんの言ふことを斥けて、

『あたし明日からは美佐ちゃんを持つて来てくれるから、御飯はそれで澤山です』

と、言はうかと思ひました。

『それだから、あたしはもう蛇と仲よくするのは厭』

とも言はうかと思ひました。けれども美佐男が言ひ置いて行つたもう一つのことを思ひ浮べると。若し自分がそんなことをお婆さんに話したならば、美佐男や臺所の小母さんがどんなことになるか解らないと思ひました。唯だひとり自分の小さい胸の中に秘密を藏めて、なんと言つていいか、何うしたらばいいか解らないやうな様子をしながら、まじ／＼とお婆さんの顔色を窺つてゐまし



た。

すると、かうして黙つてゐるみどりの様子は、直に怒り易いお婆さんの心をいらたせました。

『お前はなせ黙つてゐるのだ』

と、お婆さんは聲を荒げて怒鳴りました。

『さうして黙つて許りゐる所を見ると、お前は矢つ張りまだわたしの言ふことを聞くのは厭だと思へるな。厭なら厭でもうわたしは無理に此の御馳走を食べてくれと頼みはしない。だが、お前は一體此の御馳走と此の短刀とどつちがいいと思ふな』

と、膳の上から短刀を取り上げて、

『此の水のたれるやうな切れ味のいい短刀と、此のいろくくのうまい御馳走とどつちがいいと思ふな。わたしが此の短刀をお膳の上へ載せて来たのは、お



膳の上の飾物にするためぢやない。お前がどうあつても此の御馳走が厭だと

言ふなら、わたしはその代りにお前に此の短刀を食べさせる』

と、みどりの眼の前に短刀を突き付けました。

みどりは慌てて飛び上るやうに身を引きました。

『何うだ。此の切れ味のいい刀を食べて見たいか。どうしても御馳走を食べるのが厭なら、此の刀をお前の口の中へ突き込んで、かりくると口の中を搔廻してくれるから何うだ。咽喉から腹の中へ突き通して、腹の中臓腑をえぐり出してくれるが何うだ』

と、お婆さんはみどりの胸藏をとりました。みどりは極度の恐ろしさに、顫えました。聲を立てることも出来ない程ふるくと顫えて眞青に青ざめた顔をお婆さんの眼に向けました。

『さ、何うだ。口の中へ突き込むが何うだ』

その時のことでした。恐ろしいほど眞つ黒な家の外の間に、悲しく咽ぶやうに吹いてゐる烈しい風の音に紛れて、突然身を切られたやうなけたたましい女の叫び聲が起りました。お婆さんは弾ね返されたやうにみどりの傍を離れて、耳を澄まして第二の叫び聲を聞きました。不意に家の内外には大勢の騒ぎ立つ氣配がしました。

「お婆さん」

と、慌ただしい叫び聲が板戸の間近へ走つて來ました。

「大變だ。お婆さん、大變だ」

と、板戸の外では氣が狂つたやうに板戸を叩きました。

お婆さんの顔色は見る間に變りました。短刀を逆手に握つたままつかくと板

戸の傍へ立ち寄つて、

「畜生。足がついたかな」

と、ふてくしく口走りながら、鍵を外して板戸を押開きました。

「お婆さん」

と、其處に立つてゐた男が言ひました。

「何うした」

と、急ぎ込むお婆さんの聲が續きました。

「お婆さん。大變だ」

「何うした」

「女が死んだ」

「女が死んだ」

「女が獅子の檻で死んだ」



『獅子の檻で死んだ』

お婆さんは我を忘れて家の外へ飛び出して行きました。

其の時、家の内外には獅子の猛り立つ叫び聲と、しめ殺されるやうな鋭い女の叫び聲と、氣が転倒したやうに騒ぎ立つ大勢の聲とが、悲しく咽んでゐる烈しい風の中に入れ亂れてゐました。獅子はその野生の血の漲つたやうな叫び聲を続け、女はその死後の息を洩らす苦しい呻き聲を続け、大勢の者は火の付いたやうな狂亂の聲を續けてゐました。お婆さんが庭へ駆け下りて行つた時には、眞つ暗な闇の中を幾つかのカンテラが走り、大勢の者が獅子の檻へ走つてゐました。

始めてカンテラの灯が獅子の檻を照らした時、獅子は美しい女を脚の下にふまへて、怒りに狂ひ立つ物凄い唸り聲を洩らしてゐました。女は獅子の脚の下にふまへられたまゝ、血まみれになつて仰向けに打倒されてゐました。

『プリンス』

と叫び聲が、支那人の口から突つ走りました。

『プリンス。プリンス』

と、續いて呼ぶ叫び聲が、大勢の口から突つ走りました。

けれども、獅子は容易に怒りを鎮めることが出来ないやうに、物凄く唸り聲を續けながら、女を脚の下にふまへたまゝ、檻の外に立つ大勢の者を睨み廻しました。次いで幾のカンテラが檻の周圍から明るく檻の中を照らした時、大勢の者の眼には口輪を噛み切つて大きな口を開けてゐる恐ろしい獅子の姿が映りました。片眼を搔破られて、たら〜と血のたれてゐる物凄い獅子の姿が映りました。その恐ろしく物凄い獅子の姿にも増して、獅子の脚の下には見るからに無惨な女が映りました。

女の眼はもう閉ぢられてゐました。長く美しい黒髪は血潮と共に檻の床板を流



れてゐました。透き通るやうに白く美しい顔はべとべとと、血潮に染められて
ゐました。雪のやうに、美しい手からも、雪のやうに、白く美しい足にも、生
々しい血潮がたら〜と滴るやうに流れ出してゐました。女にはまだ幽かな虫
の息はありました。けれども、獅子の鋭い歯を立てられて血まみれになつてゐ
る體を、獅子の脚の下に踏みつけられたまゝ、苦しげに手足を藻掻ながら呻き
聲を洩らしてゐる許りでもう全く正氣を失つてゐました。手足を藻掻いて呻き
聲を洩らしながら、血まみれた美しい齒を食ひしばつて、苦しげに齒ざしりを
してゐました。

二十四

檻の外には大勢の者が息を殺して立ちました。まだ女に息のある様子を見た時
には、支那人はいきなり入口の戸を押開けて、檻の中で入らうとしました。大

勢の者も手足を空にして藻掻いてゐる女の姿を見た時には、檻の中へ入つて女
を連れ出さうとしました。けれども、かうして荒々して猛り立つてゐる獅子の勢
ひを見ては、唯だ檻の外に無益な騒ぎをして、其の成り行きを見てゐるより他
ありませんでした。

『駄目か』

と、一人が言ひました。

『とても駄目だ』

と、一人が答へました。

『中へ入れないか』

『とても入れない』

『助からない』

『もうとても助らない』



と、大勢の言葉が突つ走りましました。
その時、大勢の後から、

『畜生』

と、罵るお婆さんの聲がありました。

『とう／＼やつたな』

と、お婆さんの眼は鋭く女の上に注がれました。

女の息は次第に絶えて行きました。手足は次第に動かなくなつて行きました。

猫が鼠を𦏧るやうに、獅子が女の體をずる／＼と引き摺つても、女はもう引き摺られたまゝになつて行きました。獅子が鋭い爪を眞つ白な肌を立てても、女はもう爪をたてられるまゝなつて行きました。遂に痛ましい無残な最後の時が過ぎて行きました。

すると、ギヤマンのやうなお婆さんの眼が光つて、

『とう／＼息を引取つたな』

と、流石に恐を抱いたやうな聲でつぶやきました。

其處には恐ろしい沈黙がありました。驚怖と、憎えと、異様の思ひとに打たれ

て、お婆さんを始め、支那人や大勢の者は黙つて女の死骸に眼を注ぎました。

漆のやうに眞の黒な闇に包まれ。咽び泣く烈しい闇し夜の風に包まれながら、

一同は寒氣立つたやうな顔付をして言ひ合はせたやうに黙り込んでゐました。

けれども、間もなくお婆さんは低く呻くやうに言ひました。

『だが、何うして穴倉を出たかな』

そして、責めるやうに支那人を見て、

『お前さん知らないかな』

と、言ひました。

『知らない』





と、支那人は顫える聲で答へました。

『何うして檻の戸を開けたな』

と、更に責めるやうに支那人に言ふと、

『知らない』

と、支那人は顫える聲で答へました。

お婆さんは大勢を見廻しました。

『誰か穴倉の出口を開けつ放して置いたんぢやないか』

と、大勢の者に當り散らしました。

『そんなことは知らない』

と、大勢は口々に言ひました。

『誰かが檻のしまりを忘れたに違ひない』

『そんなことがあるもんか』



檻の中では獅子が血まみれの女を嬲つて居ました。

二十五

やがて、その悲しく恐ろしい夜も明けて、どんよりとうすれ日のさす朝が來ると、獅子の檻の床板に赤黒く美しい女の血が残つてゐる許りで、美しい女を餌食とした獅子も、眞つ暗な闇の中に騒ぎ立つてゐた大勢の者も、皆なけろりとしたやうに静まり返つてゐました。けれども、此の美しい女の死に次いで、此の怪しい家にはいろいろの思ひがけない出來事が生れて行きました。

美佐男はその朝も座敷牢の窓の下で握り飯を運んで行きました。小母さんが内所で持たした握り飯の包を抱えて、お婆さんや支那人達の眼を忍びながら、こそくと窓の下へ走つて行きました。其處に坐つたまゝ二日目の夜を明かした痛々しいみどりの姿を見て、飛び立つやうに窓の前へ駆け寄つて行きました。



嬉しげに握り飯を食べ始めたみどりの姿を見ると、美佐男は嬉しげな様子をしました。

『君は昨夜の騒ぎを知つてゐる？』

と、うすら寒いやうなそぞろ顔をして囁きました。

『ええ。此の中で聞いて居たの』

と、みどりも寒氣立つたやうなそぞろ顔をして囁きました。美佐男はその恐ろしい光景を思ひ浮べたやうに、

『そりやあ怖かつたよ』

と、言ひました。

『なんのことだつたの』

と、みどりは眼を睜つて尋ねました。美佐男は恐ろしげな眼付をして、

『綺麗な女の人が獅子に噛み殺されたんだよ』

と、言ひました。

『女の人が獅子に噛み殺されたの』

と、みどりは握り飯を食べかけてゐることも忘れて、弾ね上げられたやうにびつくりしました。

『血だらけになつて死んで居たんだよ』

『まあ』

『そして、とう／＼獅子に喰はれて終つたんだよ』

『まあ、獅子に』

『僕はみんなと一緒に獅子の檻の前へ驅けて行つて見たけれど、怖くつて體がばたばた顫えて終つたよ』

『怖いことね』

と、みどりは憎えたやうに肩をすぼめて言ひました。





すると、美佐男はたまらなく悲しげな顔付をして、

『ねえ、みどりちゃん』

と、沈んだ聲で言ひました。

『僕は昨夜もいろく考へたよ』

『なにを』

『僕はもう、此處の家に居るのは厭になつた』

『此處に居るのか？』

『僕はなんだか悲しくつて仕様がなないんだ。あの女の人は獅子に噛み殺されるし、君はかうして座敷牢へ入れられてゐるし』

と、美佐男は眼の中に涙を浮べて、

『ねえ、君。二人して何處かへ行つて終はうか』

と、深く思ひ入つてみどみの顔を見ました。



みどりはびつくりして眼を睜りながら、

『何處かへ』

と、悲しさうに涙を浮べました。

『僕はもう何處か知らない所へ行つて終ひたい。何處でもいいから此處の家を離れて遠い所へ行つて終ひたい』

と、美佐男は遣る瀬ない悲しさにそそられるやうに見えました。

『ねえ、美佐ちゃん』

と、みどりは其の眼を輝かして言ひました。

『港を出て行く船は何處へ行くの』

『港を出て行く船つて、遠くへ行く船のこと？』

『あの船は遠くへ行くの』

『海を渡つて遠い所へ行くんだよ』



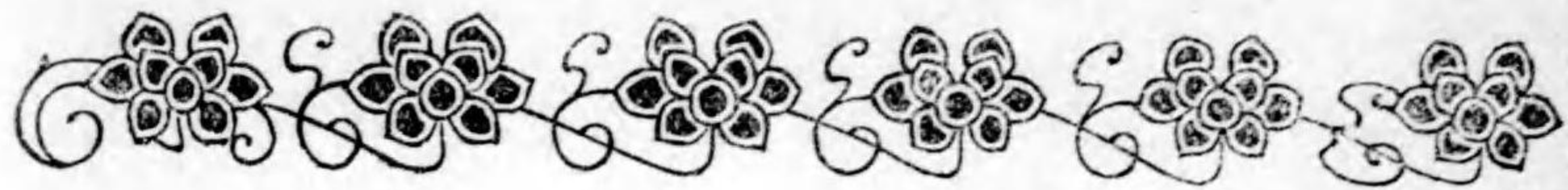
「それちや、あの船へ乗ればあたしのお家の方へ行けるの」
「君のお家の方つて。君のお家は何處なの」
「遠い遠い所なのよ」
と、みどりは言ひやうもなく心細げな様子をしました。

二十六

其の時、美佐男の眼は急に生々として來ました。
「でも、君、いくら遠い所でも、あの船へ乗れば、行くことが出来るんだよ」
「行くことが此來るの」
「ねえ、君二人して、君のお家へ行つて終はうか」
「ええ、ええ」
二人はかう言つて話し合ひました。出ることの出来ない座敷牢に入れられてゐ



る現在の身の上を忘れて、直にも此處から船の所へ逃げて行くことが出来るやうな氣になりました。互に希望に充ちた嬉しげな顔を見合せました。
けれども、その時、美佐男はふと人の足音に驚いて、いきなり傍を振り向いて見ると、其處には恐ろしい顔をして、自分達二人の様子を睨んでゐるお婆さんの姿がありました。二人は忽ち青くなつて顫えました。みどりは窓の隙間からお婆さんの顔を見つめたまゝ、美佐男はいきなり臺の上を飛び下りてお婆さんの顔を見つめたまゝ、エレキにかかつて體の自由を失つたやうに、怖々と其處に居すくんで終ひました。
お婆さんは矢庭に二人の傍へ進み寄つて來ました。打たれはすまいかと思ふやうに身をすくめてゐる二人の前に立つて、
「何をしてゐるのだ」
と、烈しい怒りに聲も出なくなつたやうに、顫えを帯びながら二人を見較べま



した。しかも、みどりの顔を出してゐる窓の上に、幾つかの握り飯が載つてゐるのを見ると、

『此の畜生は。此の畜生』

と、お婆さんの怒は極度に達しました。鬱閉されてゐた感情が一度に破裂して来たやうに、わななくと怒に顫える手は虚空に振上げられました。

『畜生』

と、割れるやうな聲で怒鳴り付けながら、ピシヤリと美佐男を地べたへ張り倒しました。

『あれはなんだ。あの握り飯はなんだ』

と、地べたに倒されてゐる美佐男の背中を、いま／＼しげに蹴飛ばしました。

美佐男は蹴飛ばされても黙つて蹴飛ばされてゐました。お婆さんは蹴飛ばしても蹴飛ばしても腹が癒えないやうに、二度三度と続けざまに美佐男の背中を蹴



飛ばしました。

『變なことだ、變なことだと思つてゐたら、矢つ張お前がこんなことをしてゐたのだな。昨日もいくらいろ／＼とうまひものを持つて来て見せても、あの子は左程欲しがるやうな様子をしてないのが、わたしはどうも可笑なことだと思つてゐたら、矢つ張お前が握り飯なんかを運んでゐたのだな』

と、口から火を吐くやうに恐ろしく言ひました。

『お前はなせわたし達の邪魔許をしたがるのだ。なせ先から先へとこんなになつたし達の邪魔をしたがるのだ』

と、美佐男の襟首を掴んで、力に任せて引き摺り起しました。

『なせお前はわたし達の邪魔許したがる。なんの怨があつてわたし達にかう邪魔許したがる』

と、片手でこつ／＼とこづき廻りました。



『わたし達はお前に有難く思はれるとも、怨みを受ける筈はない。お前にこんな邪魔をされる筈はない』

と、引き摺り廻しても、こづき廻しても、まだ足りなげに言つた。

『さ、立て。立て。もうお前も此の儘にはして置かない。お前も穴倉へ叩き込んで乾干にしてくれ』

と、無理に引つ立てて行かうとしました。

その時、美佐男は急に泣き聲をあげて、

『お婆さん、御免なさい』

と、お婆さんの手を振放さうとしました。

けれども、夜叉のやうに猛り立つてゐるお婆さんの耳には、もうなんにも入りませんでした。恐ろしい野生の獣が得物を引き摺つて行くやうに、泣き喚いてゐる美佐男をすくくと引き摺つて行きました。



二十七

其處には悲しい日と悲しい夜とが續きました。

じめく〜と陰鬱な灰色に掻き曇つたまゝに、寂しく暮れて行く悲しい夕暮の線返されました。港の口に突き立つてゐる山を越えて、遠い海の中から吹いて來る咽び泣くやうな風の夜が繰返されました。漆のやうに眞つ黒な、眼の痛くなるやうに眞つ黒な、そして息の詰るやうに眞つ黒な闇が繰返されました。お婆さんや支那人を始め、此の怪しい家の幾人かの男女達は、如何にもその悲しい夕暮を恐れ、如何にその咽び泣くやうな風の夜を恐れ、如何にその眞つ黒な闇を恐れたでせう。かゝる場合にもなほ、利慾に眼のくらんでゐるお婆さんと支那人とは、茶の間の長火鉢を挟んで興行の相談に我を忘れてゐました。けれども、幾人かの男女達は慘とした痛ましい感に打たれて居ました。



お婆さんは長火鉢を挟んで坐つてゐる支那人に、
『もうかうなれば仕方がないから、此の儘直に臺南へ出掛けるさ』
と、捨て鉢になつてゐるやうな調子で言ひました。
『さうしなければ損がゆく、關はずに出掛ける方がいい』
と、支那人もお婆さんの捨て鉢に相槌を打つてゐました。
けれども、幾人かの男女達は別の間に怖々と體を摺り寄せて、
『なんと言ふ氣味の悪い夜許り續くんだらうな』
と、一人が肌寒げな様子をして言ふと、
『ほんとにぞくぞくと寒氣のするやうな夜許り續くんぢやないか』
と、一人はぶるぶると胴顫ひをしながら言ひました。
『あの音を聞きな。風が泣いてゐるやうに聞える』
『ほんとに外は恐ろしいやうな眞つ暗い闇だ』



『なんだかまだあの女の叫び聲が聞えるやうだな』
『俺もなんだか、まだあの女の血だらけな姿が、眼の前にちらつてゐるやうだ』
『こんな晩にはあの女の幽霊が闇の中に立つてゐるかも知れない』
と、皆なおちけ氣づいたやうに體を摺り寄せて行きました。
すると、この中の一人がひそくと聲をひそめて、
『俺アお婆さんや支那人さんがあんまりだと思ふ』
と、囁きました。
『そりやあ、俺もあんまりやり方が非道過ぎると思つてゐる』
と、他の一人も尤もらしく言ひました。
『あんな非道い死に態をさせるまでにしなくつても、なんとか他に道があつたらうにな』



「今度はあの子の番かも知れないな」

「可哀さうに、あの女の子もことによると死んで終ふかも知れない」

「今日も非道くやられて、ビイ／＼と泣いてゐたぢやないか」

「さうだ。もう美佐公が穴倉の中だから、お婆さんも安心して仕事が出来るんだらうよ」

「仕事と言やあ、明後日はいよいよ臺南へ乗り込むと言ふぢやないか」

「そんな話だな、もう獅子の方はあんなことになつて終つたから、仕方なく支那人さんが女の代りをするさうだが、蛇の方はあの女の子をあつて連れて行くと言ふことだ」

「あのままで連れて行つても、なんにも藝は出来ないだらうがな」

「其處がお婆さんの手のさ。お婆さんはあの子を連れて行つても、何も見物人にあの子の蛇使を見せようと言ふんぢやない。あの女の子が蛇の檻、抛り



込まれて、氣絶をする所を見せようと言ふんだ。毎日氣絶する所を見せようと言ふんだ」

「そして、蛇に巻きつかれて、咽喉でも絞め殺されたら、その方が反つていい言つてゐたんぢやないか」

二十八

「だが、いくら俺達でもそんなむごいことは見てゐられないな」

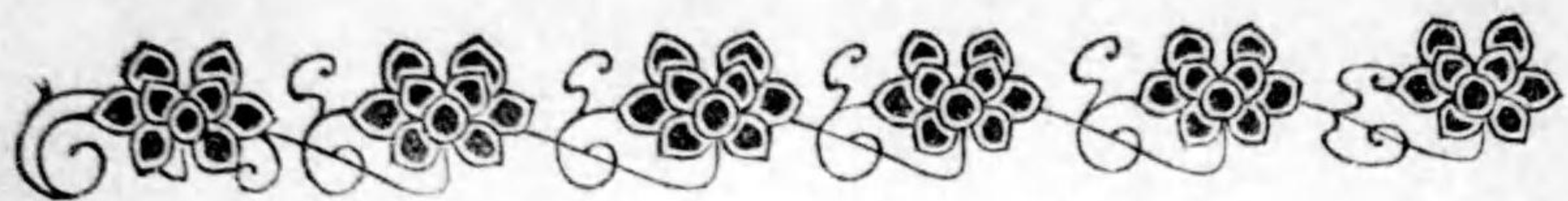
「所が、それが見物人には大受けだらうと言ふんだ」

「いくら見物人に大受けだつて、そんな真似までしなくつてもいいだらうぢやないか。蛇使ひなら、蛇に馴染んでゐる美佐公もゐることだからよ、美佐公に蛇を使はせたらよささうなものぢやないかな」

「ところが今度は美佐公は穴倉の中へ置いて行くんださうだ。臺南の方の相手



が急に美佐公はいらないと言つて来たんださうだ』
と、幾人かの者はかう言つていろ／＼の噂をし合ひました。
その時、臺所の小母さん急に痛々しい感じに打たれたやうに、
『ほんとに、ああしてあの女の人は獅子の檻に飛び込むし、あの女の子は座敷
牢の中へ抛り込まれてゐるし、美佐ちゃんも美佐ちゃんも、あの女の人の代
りに穴倉へ叩き込まれてゐるんだもの考へて見ると厭なことだね』
と、しみ／＼とした調子で言ひました。
すると、最前から考へ込んでゐた男が、
『俺ア、こんな晩には故郷のことが思ひ出されてならない』
と、顔をあげて悲し／＼に言ひました。
『全くこんな晩には、故郷へ歸りたいやうな心持がするね』
と、小母さんは心から同感したやうに言ひました。



他の者もそれ／＼に口を出して言ひました。
『さうだな。俺にはまだ父親があるのだ』
『俺には年をとつた母親がある』
『俺にはもう頼るものはないが、それでも俺は東京で生れたんだ』
『そりや、生れを言ひ立てりやあ、俺だつて東京の生れた。俺ア、東京の眞
中で生まれた人間なんだ』
『俺はもうこんな所にこんなことしてゐるよりは、故郷へ歸つて呑氣に畑へで
も出てゐた方がいいやに思はれるな』
『全くさうだな。何時までもこんな所にこんなことをしてゐるよりは、故郷へ
歸つて父親の手傳ひでもして暮らした方が、いいことのやうに思はれるな』
『早くなんとかして内地へ歸りたいものだ』
『ほんとに早く内地へ歸りたいものだ』



と、皆なもの皆な、それづくに悲しい郷愁の思ひに沈みました。

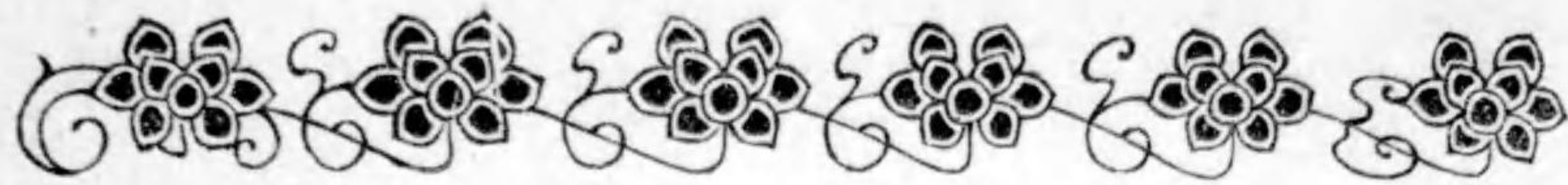
すると、その時、突然暗い廊下からけたたましく悲鳴を上げるお婆さんの聲が起りました。大勢の者はびつくりして胸を跳らせながら、お婆さんの氣配を窺ふやうに、怖怖と足音を忍んで廊下へ出て行きました。

廊下には暗がりの中に立つて暗がりの中に何物かを狙つてゐるやうなお婆さんの姿がありました。お婆さんはその暗がりの廊下に、血だらけになつて立つてゐる美しい女の姿を見たのでした。その暗がりの廊下の障子に、さらく、さらくと、血に染められた美しい女の髪の毛の音を聞いたのでした。

『お婆さん』

と、支那人は後からお婆さんの體を抱きとめて言ひました。けれども、お婆さんはいきなり支那人の手を振拂つて、

『お前はわたしを睨んでゐるな』



と、暗がりの中に眼を見据えて言ひました。

『お婆さん、何うしたんだ。何うしたんだ』

と、他の者もお婆さんの體に手をかけて言ひました。けれどもお婆さんは矢つ張その者の手を振拂つて、

『畜生。畜生。お前はわたしを殺す氣だな。お前はわたしを殺す氣だな』

と、なほ暗がりの中を睨んでゐました。

二十九

その夜、お婆さんは一晩中、その美しい女の幻に苦しめられて居ました。眼に見えない女の幻に苦しめられて、恐ろしい狂亂を續けました。けれども、その夜の明けて白々と明け方の光が射して來ると、けろりとしてお婆さんは靜かになりました。其の恐ろしい狂亂も夜の闇と共に去つて終つたやうに、その



日の午前は何事もなく過ぎました。

けれども、その日の午後、お婆さんは思ひ掛ない人の來訪に驚かされました。表口に立つて案内を乞ふた聞き馴れない聲を訝りながら、お婆さんがこそくと表口へ出て見ると、其處には盲目の御爺さんが立つてゐました。

『何用かな』

と、冷やかに言ひました。

すると、盲目のお爺さんはじつとその聲に耳を傾けて、

『わしぢや。お前さん、久し振りぢやつたな』

と、つかくと家の中へ入つて來ました。

お婆さんは探りを入れるやうにお爺さんの様子を窺ひました。

『わたしはまだお前さんに近づきはないやうだが、お前さんは一體誰だ』
と、詰るやうに言ひました。



『お前さんにはわしが解らないと見えるな。だが、わしはお前さんを知つてゐる。わしはお前さんの聲を聞いたことがある』

『わたしの聲を聞いたことがある？。何うしてだ。一體、お前さんは何處の誰かな。そして何處から來なすつたのだな』

『何處から來たかと聞くのかな。何處から來たか、それは言ふまでもないことぢや。わしの様子を見たらばお前さんには直に、わしが何處から來て、何處の誰だと言ふことが解る筈ぢや。わしは此の南の國に育つたものではないの

ぢや』

と、お爺さんが意味ありげに言ひました。

お婆さんの眼は忽ちギロリと光りました。お婆さんには直にそれが北の國から來たのだと言ふことが分かりました。けれども、お婆さんはこんな事には馴れてゐました。



「さうかな。お前さんは南の國の人間ぢやないと言ふのかい』
と、圖々しく落ち付いて言ひました。

「何うちやな。わしが何處から来たか解つたかな」

「成る程。さう言ふ譯かい。遠い所を態々御苦勞だつたな」

「解つたと見えるな。さうぢやらう。解る筈ぢや。まだ大して日も立たないこ

とぢやが、お前さんは確かにわしの咳をする聲を聞いたことがある筈ぢや。

わしの足音を聞いたことがある筈ぢや。詳しく言つて見れば、お前さんは北

の國の或る窟の中で、わしの咳をする聲を聞いたことがあるに違ひないのぢ

や。北の國の窟の中でならずもの、一人の男と一緒に、可愛い子に話をして

ゐた時、わしの足音を聞いたことがあるに違ひないのぢや」

と、お爺さんは次第に話を進めて行きました。

お婆さんの眼は再び稻妻のやうに光りました。けれども、直に決心をつけて、



「さうかい。それでお前さんはその可愛い子供を取戻しに来たと言ふのだ
な」

と、嘲るやうな笑ひを洩らしました。

「さうぢや。有り體に言へばその可愛い子を取戻しに来たのぢや。お前さ

ん達が浚つて来たその可愛い子を取戻しに来たのぢや」

「成る程。それでわたしにもお前さんがおせつかいなお爺さんだと言ふことが

解つた。お前さんはあの北の國の窟の中でわし達をびつくりさせたお爺さん

で、人の子のために餘計な事をするおせつかいなお爺さんで、遠い所をわざ

と臺灣までお出でなすつて御苦勞様なお爺さんだと言ふ譯が分つた」

「さうぢや。人の子のために餘計なおせつかひをしてゐるのぢや。遠い所をわ

ざとと御苦勞さまなことをしてゐるのぢや。何うちやな、お婆さん。此の

年寄が人の子のために餘計なおせつかひをして、わざとやつて来たのぢや



お前さん此の年寄に免じてくれる心はないかな。年寄に免じてあの子を返してくれ心はないかな』

と、お爺さんは大人しく下手に出て、

『わしはお前さんがあの子の他にもう一人若い女をつれて来たことも知つて居るのぢや』

と、えぐるやうに言ひました。

三十

流石にお婆さんも度膽を抜かれました。

『お前さんはその事まで承知ないのかな』

と、聲をはずませて言ひました。

『さうぢや。そんなにびつくりなさることはないぢや』



と、お爺さんは冷やかに嘲笑つて、

『わしはあの子と同じ船で若い女が連れられて来たことを知つて居るのぢや。

けれども、今わしはその女のことを言つて見た所で、もう無駄のことだと言

ふことも知つてゐる。可哀さうに、その女はもう死んで終つた。獅子の檻へ

飛び込んで自殺をして終つた。わしはもうなんにもあの子のことは言はぬ。

唯だ、あの女の子だけを返して貰ひたいのぢや』

と、厳かに言ひました。

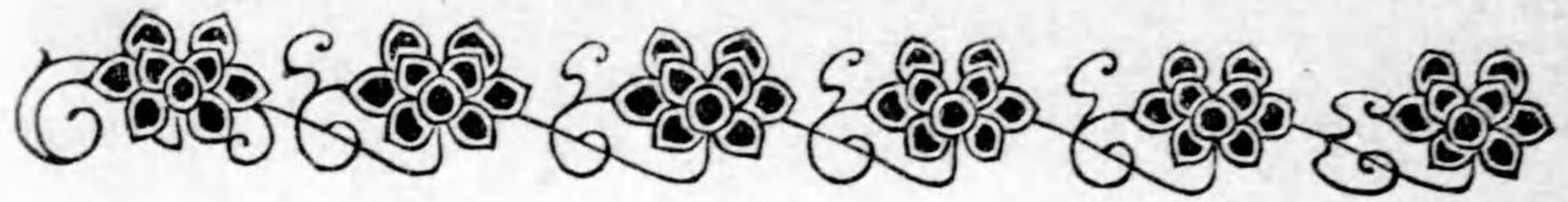
お婆さんは不氣味らしくお爺さんの顔を見まもりました。何から何まで知り抜

いてゐるお爺さんの様子を見ると、流石にお婆さんも言ひやうない恐ろしさを

覚えて、返す言葉もなくお爺さんの顔を見まりました。

お爺さんはなほ言葉を續けて、

『わしはもう残らずのことを知つてゐるのぢや。お前さんがわしに隠し立てを



しようとも、わしはもうあの子が確かに此處にゐることを知つてゐるのぢや
また、お前さんがわしに手向ふやうなことをすれば、それは反つてお前さん
達の身を危くすると言ふものぢや。わしはお前さんを何うしようとも思つて
はゐない。唯だ、あの子を返して貰ひさへすれば、それでわしの役目は済む
のぢや。わしには其の上の面倒な考へはない。だが、若しわしに隠し立てを
するやうなことがあり、若しわしに手向ひをするやうなことがあれば、お前
さん方は反つて自分で自分の身を殺すやうなことになる』
と、お婆さんを威壓して言ひました。
すると、お婆さんはもう何もかも投げ出したやうに、
『お爺さん、もうわたしにはよく解つた。さう事を分けての話なら、わたしは
もうなんにも隠し立てをしない。また、お前さんに手向ひなどをしようとも
思はない。わたしは確かにその女の子を浚つて來たに相違ない。そして、そ



の女の子は確かに此處の家にゐるに相違ない。わしは綺麗に返してあげる。
綺麗さつぱりとあの子をお前さんに返して上げる』
と、素直にお爺さんの言葉に従ひました。けれども、お婆さんの心には其の時
ひそかに悪事が仕組まれてゐました。
『だが、お爺さん。あの子は今寢てゐるのだよ。體の具合が悪くつて寢てゐる
のだよ。それでも關はずに此處へ起して來ようかな。それとも、お前さんが
あの子の所へ行つてくれるかな。寢てゐるものを起して來るのは可哀さうだ
から、お前さんが上つて會つてくれては何うだな』
と、表面を粧つて言ひました。
『わしに上つて會へといふのかな』
と、お爺さんの顔には意味ありげな微笑が浮びました。けれども、少しの躊躇
もなく、



『それぢや、さうしてもよい』
と、直に座敷へ上りました。

お婆さんはお爺さんの手を引いて先に立ちました。茶の間から座敷牢の前を通り抜けて、家の奥の薄暗い廊下へ導いて行きました。其時、お婆さんは不意にお爺さんの隙を見て、いきなりお爺さんの體を突き飛ばしました。お爺さんは豫めさう言ふことを覺悟をしてゐたやうに、どつしりと體を踏みしめて、

『馬鹿者め。何をする』

と、お婆さんを一喝しました。

『何を老耄め』

と、お婆さんも必死に力を籠めて突き飛ばしました。

お爺さんは滑らかに油を引いてある廊下に足をすべりました。その機につるりと前へのめると、其處の床板は左と右に分れて、お爺さんの體はその間に挟



まれました。

『態を見ろ』

お婆さんは勝ち誇つたやうに言ひました。お爺さんはその儘穴倉の中へ落ちて行きました。お爺さんが落ち込んで行つた後には、バネ仕掛の板の間がピンと弾ね返つて、再び何事もないその儘の廊下になりました。

『御大層な威し文句を並べてゐたが、案外呑氣な爺さんだな』
と、お婆さんは物凄くせせら笑ひました。

三十一

家の中は俄に騒ぎ立つて行きました。お婆さんや支那人を始め幾人かの男女達は其の夜の中に仕度をして、まだその夜の明けきらぬ眞つ暗な闇に紛れて、こつそりと臺南へ立つて行きました。かすかに明け方のうすら明りの射して來る



静かな街の中から、次第に淋しい田舎の道へかかつて行く一行の中には、赤い鼻緒の麻裏草履を結び付けて、たどくと繊弱い足を運んで行くみどりの姿が交つてゐました。

その時、みどりは如何にいちらしく、如何に痛々しく見えたでせう。俄に臺南へ立つて行くやうになつて、思ひがけなく座敷牢から連れ去られた時には、みどりは幾日振りで膳の前へ坐ることが出来ました。やゝともすれば後れ勝なるみどりの様子を見ると、一行の中の一人は荷車の上に乗せて行つてくれましたけれども、幾日の間暗い座敷牢に閉ぢ籠められた、弱々しく疲れ果ててゐたみどりにとつては、かうして慌ただしく夜の道を急がれながら行くのがどんなに辛い事だつたでせう。かうして荷車の上に、風にも堪へないやうな痛々しい體を揉まれて行くのが、どんなに苦しいことだつたでせう。

一行はやがて賑やかな臺南の街へ入りました。その時にはもうその日も暮れて



チラ／＼と美しい灯が街の中に灯つて居ました。みどりにとつて臺南の街はまだ生れてから一度も見なかったことのない、始めての大きな街でした。眩ゆく輝く電燈の光や、見上げるやうな高い西洋造の家や、祭のやうにぞろ／＼と行き來する大勢の人や、すべて山蔭の寂しい村では見たことのない此等の都會の光景は、幼少のみどりの眼にどんなに物珍らしく見えたか知れませんでした。けれども、此の時のみどりはもう子供らしい喜びをもつて、此等の珍らしい光景を見るほどに氣軽な少女ではありませんでした。此の街の賑やかな大通りを抜けて、場末の少さは宿に着いた時には、馴れぬ一日の長い旅に疲れて、もう口を利くことさへ出来ませんでした。

殊に、お婆さんや支那人達はそのみどりに對して、直にその翌る日から蛇使ひの興行を強ひました。その時、街の辻々に、或は人眼を引き易い場所から場所には、曲藝合同大一座と言ふ興行のビラが張られてありました。大一一座付き



の樂隊は浮き立つやうな音樂を奏でながら、大通りから大通りへ、賑かな街から賑やかな街へと、華々しくねり歩いてゐました。見る物聞くもの之しい單調な生活に飽いてゐる此の都會の人々は、如何に好奇の眼をもつてその辻々のピラを眺め、如何に興ありげな眼をもつて華々しく樂隊の姿を見送つて居たでせう。けばくしい赤い帽子とけばくしい赤い洋服をつけてゐる樂隊の群の樂隊の群に先立つて行く赤い旗、青い旗、さては又紫や黄色の旗。——新奇を喜ぶ少年や少女はぞろぞろと樂隊の後をついて歩きました。單調に倦んでゐる男や女の眼は兩側の家々から樂隊に向けられました。又辻々のピラの前には黒山のやうな人ばかりがして居ました。

ピラに書かれてあるいろくの曲藝の中には、西洋の曲馬がありました。獅子と支那人との格闘がありました。そして最後に可憐な小娘の蛇使ひと言ふのがありました。此の街の人々にとつては、西洋の曲馬と言ふことも珍らしい事でありました。



獅子と支那人との格闘と言ふことも珍らしいことでした。けれども、可憐な小娘が恐ろしい大蛇を使ふと言ふことは、如何に多くの好奇心と、多くの興味とを喚び起させたか知れませんでした。殊に、仰々しい、大袈裟なピラの、文句——愛らしく美しい小娘、南洋から來た恐ろしい大きな蛇、さう言ふ風な文字は如何に多くの驚異をもつて見られたか知れませんでした。多くの人は早くも多くの觀衆の前に立つ美しく愛らしい小娘の姿を想像し、小娘の前に現はれた恐ろしい長大な蛇の姿を連想し、そして、その美しく愛らしい小娘が恐ろしい長大な蛇を首に巻く物凄い蛇使ひの有様を想像して、忽ちこれを此の街一ぱいの大きい評判をしたのでありました。

三十二

それと同時に、街の中には新しい大きな小屋掛けの演藝場が出來上りました。



空に聞える許りほど高く、幾千人の観衆を入れるに充分な程廣々、珍しい大きな小屋掛けの演藝場が出来上りました。演藝場の前には曲藝合同大一座と記されてゐる幾本かの旗を立てられて、見上げるやうな高い旗竿には、幾十ともなくいろ／＼の萬國旗が掲げられました。演藝場の正面にはけば／＼しく色彩を施した幾枚かの繪看板が飾られました。早くも演藝場の前に黒山のやうに群つて来た多くの人々は、街中をねつて歩いた樂隊の姿を見た時よりも、ピラの中の仰々しい大袈裟な文字を見た時よりも更に一層の好奇心と、一層の興味と、一層の驚異の眼とをもつて、如何に物珍らしげにその幾枚かの繪看板を仰ぎ見たでせう。繪看板の繪の中には獸類のすることと思はれないやうな巧妙の曲藝を演じて居る西洋曲馬の繪が書いてありました。別の一枚には眼を怒らして踊りかゝらうとする恐ろしい獅子と、獅子と格闘する身構へをして勇ましげに立つてゐる支那人の繪が書いてありました。



更に外の一枚には、美しく愛らしい可憐な小娘が、美しく華やかな洋服を身に付けて、胴から首の邊には見るからに恐ろしげな大きな蛇を巻きつけてゐる繪が書いてありました。殊に、その口から燐のやうな赤い舌を吐いてゐる物凄さギラ／＼と射るやうに鋭く輝いてゐる大きい眼や刀物のやうに鋭く光つて居るきい牙の物凄さ。そして金の色を帯びて青く彩られてゐる鱗や、白と赤との一つ置きに彩られてゐる腹を見せて、可憐な少女の胴から首の邊へからみ付いてゐる蛇の姿の物凄さ。かくして、みどりは遂に蛇使ひを餘儀なくしなければならぬ恐ろしい運命に落ちて行きました。幾日の間暗い座敷牢の中に閉ぢ籠められてまでも、また、幾日かの間食べるものも食べさせられない恐ろしい折檻を忍んでまでも、お婆さんや支那人の言ふことに従はなかつた蛇使ひを餘儀なくしなければならぬ恐ろしい運命に落ちて行きました。あれほどまでに思ひやりの深い優しい美佐男を



して、絶え間ない心配をさせた蛇使ひを、みどりは遂に餘儀なくしなければならぬ。恐ろしい運命に落ちて行きました。みどりは何故かうして遠い道を打狗から臺南へ運ばれて来たか知らずに、見知らぬ街の宿にうろくしてゐる間に悲しい運命は一刻一刻と迫つて行きます。かうして演技場の前に掲げられた繪看板の中の主人公となつて、多くの人々の夥しい噂の中心となつてゐることも知らぬ間に、悲しい運命は一刻一刻と迫つて行きます。

なんの容赦もなく一刻一刻に時を刻んで行く時計の針。

なんの容赦もなく一刻一刻とみどりを恐ろしい運命の中へ運んで行く時計の音、そして、なんの容赦もなくその夜は過ぎ、その朝は明けて、みどりを恐ろしい運命の前に導いて行く時計の針の刻む音。

遂にその恐ろしい日は來ました。みどりが蛇を使ふ恐ろしい興行の日は來ました。

三十三

けれども、みどりを引き連れてお婆さんや支那人が出發した後の、かの打狗の怪しい家には、お婆さんや支那人の思ひがけない驚くべき出來事が起つて居ました。

最初、バネ仕掛の廊下から穴倉の中へ陥れられた盲目のお爺さんが、する／＼と摺鉢の底のやうな穴倉の奥へ落ちて行つた時、直ぐ其の間近に蹲つて居た美佐男は、けたたましい不意の物音に驚いて、慌てて後へ飛び除きました。

落ち込んで行つた盲目のお爺さんは、直に立ち上つて美佐男の氣配に耳を傾けながら、

「誰ぢや」

と、嚴かに誰何しました。





美佐男は黙つて闇を透して見ました。

「前處に居るのは誰ぢや」

と、お爺さんは繰返して誰何しました。

「僕です」

と、美佐男ははつきりと答へました。

お爺さんは其の思ひがけない聲に驚いで、

「なんぢや」

と、闇の中に見えぬ眼を睜りました。美佐男は再び繰返して、

「僕です」

と、男らしい聲で答へました。

「男の子ぢやな」

「僕は美佐男です。君は誰です」



「わしか。わしは今、思つてゐた通りのことを、此處のお婆さんにさせられた者ぢや」

と、お爺さんは若々しく言ひました。けれども、何よりも思ひがけない可愛らしい美佐男の聲に驚いて、

「お前は賢こさうな子ぢや。わしの近くへ來な」

と、美佐男を自分の近くへ招きました。

美佐男は躊躇なくお爺さんの傍へ寄つて行きました。

「あなたはお爺さんですね」

と、びつくりしたやうに言ひました。お爺さんを手探つた美佐男の體を撫で、見て、

「お前はまだ小さい子ぢやな。可愛らしさうな子ぢや」
と、美佐男の手を引いて自分の傍へ坐らせました。



「お前は何うしてこんな所へ入れられてゐるのぢや。何うしてこんな眞つ暗な穴倉の中へ入れられてゐるのぢや」

「僕はお婆さんに抛り込まれたんです」

「お婆さんに抛り込まれたと言ふのぢやな。何うして抛り込まれたのぢや。何うして抛り込まれたのぢや」

「僕、お婆さんに見附られて終つたんです。そして、お婆さすに怒られて終つたんです」

「何を見附けられたのぢや。何を怒られたのぢや」

「此處の家に可哀さうな女の子がゐるんです」

「可哀さうな女の子？。そして、その可哀さうな女の子が何うしたのぢや」

「お婆さんや支那人の小父さんに酷いことをされてゐるんです。嫌ひな蛇の蛇使ひになれと言つて、お婆さんや支那人の小父さんが、とう／＼その子を座



敷牢の中へ入れて終つたのです」

「さうか。そんなことをされたのか。それではその女の子は今座敷牢の中に入られてゐるのぢやな」

「お爺さん。その子は本統に可哀さうなんですよ。僕はその女の子の事が心配で仕様がななんです。その子は僕が臺南へつれて行かれて、臺南に一晚泊つて来た時にも、まだ座敷牢へ入れられてゐたんですよ。座敷牢の中に一晚中坐つてゐて、その前の日から一度も御飯を食へさせて貰はなかつたんですよ。だから僕は臺所の小母さんと相談をして、お婆さんや支那人の小父さんには知れないやうに、こつそりとその子の所へ御飯を持つて行つてやつたんです」

「お前が持つて行つてやつたのぢやな」

「ええ。臺南から歸つて來ると直に。そして、その翌る日の朝も」



『さうか。さうか』
と、お爺さんは美佐男の言葉に感動して、
『お前は優しい子ぢや。珍らしい優しい子ぢや』
と、美佐男の手をとつて可愛らしげに頭を撫でました。

三十四

『それでは、お前はさうして御飯を運んでやつた所を、お婆さんに見附けられ
たのこやな』
『ええ、その翌る朝、窓の所へ持つ行つてゐた時、とう／＼お婆さんに見附け
られて終つたんです』
『それで此の眞つ暗な穴倉の中へ抛り込まれて終つたのぢやな』
『ええ、ええ。さうなんです』



『さうか。可哀さうに。可哀さうに』
と、お爺さんは勞はるやうに美佐男の頭を撫でて、
『だが、お前、もう安心していいぞ。もう大丈夫だから安心していいぞ。わし
はその女の子を助けに來たのぢや。その女の子を助けるために遠い國から來
たのぢや』
と、言ひました。
美佐男はびつくりしてお爺さんの方を見ました。
『あの子を助けに來たの。あの女の子を助けに來たの』
と、叫ぶやうに聲をはづませて言ひました。
『それぢや、お爺さんはあの女の子を助けて下さるの』
『さうぢや。わしはきつとあの子を助けて下さるの』
『それぢや、お爺さんはあの子を助け出して下さるんですか。あの子を助け出



して下さるんですか』

と、美佐男は嬉しくつて堪らないやうに言ひました。

『きつとわしが助け出してやる。あの子許りでなくお前もきつと此の中から助け出してやる』

『僕も助け出して下さるの。僕も此の家から助けて下さるの』

『さうぢや。きつと此の家から救ひ出してやる』

と、お爺さんは誓つて言ひました。美佐男の眼からは急に嬉しい涙が落ちて来ました。涙は取絶つてゐるお爺さんの手に落ちました。

『お前は泣いてお居でだな』

と、お爺さんは見えぬ眼を睜りました。

『お爺さん』

と、美佐男は泣きながら言ひました。



『いちらしい子ぢや。優しい子ぢや。泣くことはない。もう泣くことはない』

と、お爺さんは優しく美佐男をなだめて、

『さ、泣くのは止して、わしの聞くことに答へておくれ。な、わしの言ふことに答へておくれ』

と、言ひました。

美佐男は直に涙を拭つて、

『ええ。ええ』

と、素直に點頭きました。

『お前は此の穴倉の出口を知つておるでかな。此の穴倉から外へ通じてゐる道を知つてお居でかな』

『僕、よくは知らないんです』

『よくは知らないかな』



『ええ、僕は知つてゐれば、直に此の中から逃げ出して、あの子の所へ行つたんです』

『さうぢやらうとも。さうぢやらうとも。だが、お前の眼には何處からか外の光がさし込んで来るやうな所が見當らないかな』

『外の光のさし込んでゐる所はありますよ。外からおむすびを投げ込んでくれる所には、外の光がさし込んでゐますよ』

『それぢやあ、其處が出口なのぢや』

『ええ、僕もさう思つたんです。けれども、僕は幾度も其處を押し見て見ただけで、何うしても開けることが出来ないんですの』

『さうか。鍵がかかつてゐるのぢや』

と、お爺さんは何事か考へてゐましたが、

『まあいい。此の穴倉の中にあるのも長くつて一晩か二晩ぢや、三日とゐるや』



うなことはない。間もなく外から明けてくれるものがあるに相違ない。鍵を外してわしとお前を此の中から出してくれる者があるに相違ない。お前はそれまでわしの膝へもたれかかつてゐな。さ、わしの膝へ來な』

と、美佐男を自分の膝へもたれかけさせました。

三十五

穴倉の中の夜が來ました。穴倉の中に朝が來ました。

寢初ねはじめの時から二晩目の夜が明けた時まで、此の穴倉の中には長い暗黒が續いて居ゐました。けれども、お爺さんは少しも騒さわぎませんでした。ひそかに期待してゐる所があるやうな様子をして居ゐりました。座敷牢ざしきろうの中のみどりのことを言いひ出して、幾度いくどとなく氣を揉もんで騒さわぐ美佐男を、お爺さんは優しくなだめてゐました。すると、丁度二晩目の夜が明けた時のことでした。お爺さんは美佐男を



もたれかけさせたまゝ、美佐男は甘えたやうにお爺さんの手をとつたまま、眞つ暗な闇の中に蹲つてゐた時、突然コツ／＼と穴倉の出口を叩く音が聞えて来ました。穴倉の出口を叩く音と共に、

『美佐ちゃん。美佐ちゃん』

と、小聲で美佐男の名を呼ぶ聲が聞えて来ました。

お爺さんと美佐男とは弾ね返されたやうに體を起しました。美佐男はお爺さんの先に立つて、いきなり穴倉の出口へ歩いて行きました。

『美佐ちゃん美佐ちゃん』

外では繰返して美佐男を呼びました。

『あ、小母さん』

と、美佐男は思はず大きい聲で言ひました。

『美佐ちゃんかい』



『小母さん』

『早くお出で。早く』

出口の戸は上の方へ引開けられました。二人の所には、はつと明るひ光がさして行きましました。美佐男はお爺さんの手をとつて階段を登つて行きましました。穴倉の外へ出て小母さんの姿を見ると、

『小母さん、有難う』

と、嬉しげに言ひました。

『お爺さん。此の小母さんが開けてくれたんですよ』

と、お爺さんの方を見て言ひました。

『お前の話の味方の人ぢやな』

と、お爺さんは小母さんの手をとりました。

『わしはお前さんに禮を言ひます』



小母さんは何時になく気が昂つてゐました。

『わたしはもつと早く開けて上げたいと思つてゐたんですよ。けれど、此處の番を言ひ付けられた男が、嚴重に見張りをしてゐたものだから、とう／＼今まで開けることが出来ませんでした。すると、その男が赤い酒を盗み出して飲み始めました。そして、すっかり酔ひつぶれて寝込んで終ひました。わたしはそれを待つてゐて、今やうやく開けて上げることが出来たんです』

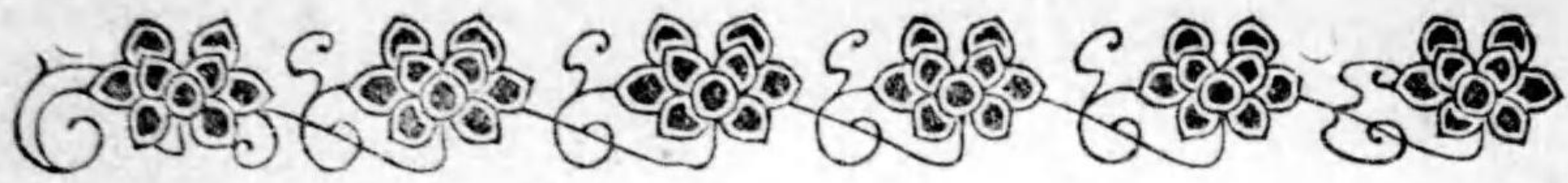
『繰返して禮を言ひます。そして、大勢の者は何うしたな。もう臺南へ出かけて終つたかな』

『もう出かけて行きました。昨日の朝暗い中に出掛けて行きました』

『それでは、あの子も一緒だつたな』

『さうです。あの子も一緒に連れられて行きました』

と、小母さんの答へるのを聞くと、



『さうだつたか。さうだつたか』

と、お爺さんはひとりで點頭いて言ひました。

三十六

その時、美佐男はもう其處に居ませんでした。お爺さんと小母さんとを其處に残して、座敷牢の窓の下へ驅けて行つてゐました。美佐男は座敷牢の窓から中を覗いて見ました。けれども、みどりはもう座敷牢の中にゐませんでした。直に裏口へ廻つてこつそり家の中の様子を窺ひました。けれども、其處にももうみどりの居る氣配はありませんでした。美佐男の心には直に蛇の檻が思ひ浮んで來ました。慌てて蛇の檻へ行つて見ました。けれども、其處にもうみどりの姿を認めることは出来ませんでした。

家の中はすべてひつそりして居りました。其處には蛇の檻もありませんでした。



獅子の檻も見當りませんでした。座敷の中へ引返して茶の間から奥の間まで残らず見て歩きました。其處には正體なく酔ひつぶれて、茶の間の長火鉢の前に寝轉んでゐる男がゐる許りで、お婆さんの姿もありませんでした。支那人の姿もありませんでした。大勢の者の唯の姿もありませんでした。家の中は人の住まない空き家のやうにがらんとして居ました。墓場の中のやうに静まつてゐました。

美佐男は驚いて穴倉の出口へ引き返して行きました。

『小母さん、みどりちゃんはもう行つて終つたの』
と、急ぎ込んで小母さんに尋ねました。

『お爺さん。もう行つて終ひましたよ。みんなあの子をつれて行つて終ひましたよ』

と、うろくしながら言ひました。



お爺さんは優しく美佐男を制しました。

『いい。いい。そんなに氣を揉まなくつてもいい』
と、静になだめて、

『行つて終つてもいいのぢや。決して心配をすることは無いのぢや。お前は直にこれからわしと臺南へ行つておくれ。あの子を助けに臺南へ行つておくれ』

と、言ひました。そして、小母さんに對して、

『それでは、お前さんは何うしなされるな』
と、懇に尋ねました。

『わたしはもう遠い所へ行きます。ずつと此の島の北部の方へ行かうと思ひます。そして、その中には何うしても内地へ歸らうと思ひます』

『では、さうしなされる方がいい。お前さんがかうして、わし達の味方をしてく



れた報いは、きつとお前さんにめぐつて行くに相違ない。お前さんにはきつと何時か仕合せなことが向いて行くに相違ない。體を大事にしなさい。そして、正直に働きなさい』

『有難うござんす』

と、小母さんは涙を浮べて言ひました。小母さんの眼は直に美佐男の方へ向けられました。

『美佐ちゃん。それでは、もうお前さんともお別れの時が来たんだよ。あたしはもうこれきりお前さんには會はれないかも知れない。體を大切にしておくれ。そして、みどちやんと一緒に仲よく大きくなつておくれ、ね、ね』

と、きつく美佐男の手を握りしめました。

美佐男もほろりと涙を落しました。

『さ、もう行つておくれ。お前さんにはまだ大事な役目があるんだからね。早



く行つて此のお爺さんと一緒にみどちやんを救つておくれ。でも、美佐ちゃん、偶にはわたしのことも思ひ出しておくれよ。ね、あたしのことも忘れずにゐておくれよ』

『小母さん』

『美佐ちゃん』

『僕はきつと忘れやしないよ』

『有難う。有難う。さ、早く行つておくれ。早くお爺さんと一緒に臺南へ行つておくれ』

小母さんは泣いて美佐男を送り出しました。お爺さんと一緒に別れを告げて行く美佐男の姿を、何時までも表口に見送つてゐました。

間もなく美佐男はお爺さんに伴はれて立派な旅館に行きました。その旅館の座敷で始めてお爺さんからみどりの父に引き合はされました。此の小さい恩人の

美佐男に懇に感謝したみどりの父と、戦場に出て行く勇ましい勇士のやうな美佐男とお爺さんと、三人は忙がはしくその旅館を立つて行きました。打狗のステーションへ。基隆直線の急行列車の中へ。臺南へ。臺南へ。汽車は黒煙を立てて打狗を發しました。

三十七

それは曲藝合同大一座の初日のことでした。ほがらかに澄み渡つた朝の空には、幾十と數知れぬ萬國旗が朝風にひるがへつてゐました。演技場の中からは賑かな樂隊の音が響いてゐました。演技場の前には犇々と多くの觀衆が詰めかけて行きました。男も、女も、年をとつた者も小さい子供も、殆ど臺南のすべてが演技場の前へ詰めかけて行きました。可なり大きい演技場も瞬く間に何千とも知れぬ多くの觀衆によつて充たされまし

た。木戸には間もなく大入滿員の札を掲げられました。やがて樂隊はその賑かな奏樂を止め、多くの觀衆は好奇の眼を輝かして舞臺を見つめました。おどけた帽子におどけた着物を着て、おどけた顔の拵へをしてゐる道化者の口上が、滿場の拍手と喝采をもつて迎へられ、滿場の拍手と喝采をもつて送られました。プログラムの始めには西洋の曲馬が一つ。その西洋曲馬の曲馬師が觀衆の前にお目通りをした時、滿場の觀衆は如何に破れる許りの拍手と喝采とを與へたでせう。獸類の仕業とは思はれない巧妙な演技を観ると、若い男達は如何に喧しく手を拍つて喝采し、若い女達は如何にめまぐるしくハンケチを打振つて喝采したでせう。そして又、曲馬師が巧妙な演技を終へて樂屋へ入つて行く時には、多くの觀衆は如何に狂氣の拍手と喝采をもつてその姿を見送つたでせう。



次いでまた、おどけた帽子におどけた着物を着て、おどけた顔の拵へをしてゐる道化者の口上がありました。二番目の演技は獅子と支那人との格闘でした。その獅子と支那人とが観衆の前にお目通りをした時には、西洋曲馬にも増して満場の観衆は如何に破れる許りの拍手と喝采とを與へたでせう。獅子の檻の中に身を跳り入れて、獅子に格闘を挑む支那人の姿を見、猛然として支那人に立ち向ふ恐ろしい獅子の姿を見ると、若い男も若い女も、すべて場内にある観衆のすべては、手に汗を握つて一心に見入り、やがてまた、支那人が獅子に打勝つて格闘を中止した時には、西洋曲馬にも増して如何に若い男達は喧しく手を打つて喝采し、西洋曲馬にも増して如何に若い女達はめまぐるしくハンケチを打振つて喝采し、そして、西洋曲馬にも増して如何に多くの観衆は狂氣の拍手と喝采とを惜しまなかつたでせう。

けれども、此の多くの観衆にはこれ以上の狂熱をもつて待ち受けてゐる曲藝が



ありました。西洋の曲馬や獅子と支那人との格闘以上に、もつと多くの好奇と多くの興味をもつて待ち受けてゐた美しく愛らしい少女の蛇使ひがありました。彼等は時の過ぎるのも待遠しい心持をもつて、美しく愛らしい小娘の、恐ろしい大きな蛇を使ふ曲藝を待受けてゐました。繪看板に見るやうな、美しく愛らしい子娘を想像し、繪看板に見るやうな、恐ろしい大きな蛇を想像し、そして、その美しく愛らしい子娘が、恐ろしい大きな蛇を厠に巻き、首に巻きつけて、物凄い曲藝を演ずる光景を想像して、多くの観衆は血に飢えた野獸のやうな渴望をもつてゐました。

その曲藝の時刻は一刻一刻に近づいて行きました。獅子と支那人の格闘の後は再び西洋曲馬の一曲がありました。それが拍子と喝采との裡に終りを告げると、その次ぎがいよゝ待構へてゐた蛇使ひの曲藝でした。すると、樂隊は曲藝の高調に達したことを語るかのやうに、高く高く心の浮き立つやうな勇まし

いマーチを奏しました。多くの観衆は片唾を飲んでひっそりと静まりました。多くの眼は一齊に舞臺へ向けられました。

三十八

かくて、いよゝゝ其の時は來ました。おどけた帽子におどけた着物を着て、おどけた顔の拵へをしてゐる道化者は、いよゝゝ舞臺の一隅に登場して來ました。その時、多くの観衆は如何に多くの好奇心と興味をもつて、此の道化者の登場を拍手と喝采したでせう。そして道化者がおどけた身振りとおどけた口調をもつて、

『太夫幼少にござりますれば、仕損じの節は幾重にも御容赦』

と、いよゝゝ蛇使ひの演藝の開始される口上を延べて引下つ行く時、多くの観衆は又しても如何に多くの好奇心と興味をもつて、その蛇使ひの演藝の開始

を拍手と喝采したでせう。

観衆の眼の前には檻に入つてゐる恐ろしい大きな蛇が現はれました。その蛇は繪看板の中の蛇よりも大きく、繪看板の中の蛇よりも恐ろしい蛇でした。續いて観衆の眼の前には、お婆さんと支那人とに付き添はれて、美しく愛らしい小娘が現はれました。その小娘は繪看板の中の小娘よりも美しく、繪看板の中の小娘よりも愛らしい小娘でした。多くの観衆は息を殺してその蛇を見まもり、息を殺してその小娘を見まもりました。樂隊はその賑かな奏樂を中止してひっそりと静まり返りました。さしものに廣く、さしものに多くの観衆に充たされてゐる演技場の中は、水を打つたやうにしんとなりました。

その刹那でした。全くその一刹那でした。思ひがけなくその異様の沈黙を破つて、突然木戸口の方に向けたたましい物音が起りました。多くの眼が一度に其の物音の方へ向けられた時、飛ぶやうに舞臺へ駆け上つて行つた一人の愛らしい

少年がありました。

『みどりちゃん』

と、少年は急ぎ込んで蛇使ひの小娘を呼びました。小娘も又、少年の姿を見る

と、

『美佐ちゃん』

と、いきなり少年の體へ飛びついて行きました。

『みどりちゃん』

『美佐ちゃん』

二人は互に飛びすがつて、肩と肩とに手をかけました。多くの觀衆は驚きの眼を聳てて、その愛らしい少年と少女との姿を見ました。お婆さんと支那人とが呆氣にとられて鋭く眼を睜つた時、みどりと美佐男とが嬉しげに顔を見合つた時、續いて舞臺の上にはみどりの父が駆け上つて行きました。みどりの父と一

緒に盲目のお爺さんが駆け上つて行きました。

『あ、父さん』

と、みどりは夢中で叫びました。

『みどり』

と、父はいきなり駆け寄りしました。

『父さん』

『何うした』

みどりの父はみどりを抱寄せました。みどりは父にしがみ付きました。父の眼からは涙が出て來ました。みどりの眼からも涙が出て來ました。

『無事でよかつたな。無事でよかつたな』

みどりの父はみどりを抱きしめて言ひました。

多くの觀衆は蜂の巢のやうに湧き立ちました。舞臺の上にははらくと舞臺に



驅け上つて、お婆さんと支那人とを捉へた四五人の男がありました。
 其の中に威張つて居る美佐男の顔を御覽なさい。其の中にはほほ笑んでゐる盲目
 のお爺さんの顔を御覽なさい。

—をはり—

島く往燕

大正三年五月二十日印刷
 大正三年五月廿五日發行
 著者 長谷部湘雨

不許複製
 定價十五錢

發行者	增田義一
印刷者	渡邊八太郎
印刷所	日清印刷株式會社
發行所	實業之日本社
	東京市京橋區南紺屋町十二番地 郵便貯金換替口座三二六

<p>■▷ 米光 關月著</p> <p>秋子の命 四版</p> <p>定價 二十五錢 郵稅 四錢</p>	<p>▷ 文學士 高木 敏雄著</p> <p>大正新イソツブ 三版</p> <p>定價 八十錢 郵稅 八錢</p>	<p>▷ 長谷部 湘雨作</p> <p>見知らぬ國へ 再版</p> <p>定價 三十錢 郵稅 六錢</p>	<p>▷ 長谷部 湘雨作</p> <p>露子 姫 四版</p> <p>定價 四十錢 郵稅 四錢</p>	<p>▷ 三津木 春影著</p> <p>孤島の姉妹 三版</p> <p>定價 卅五錢 郵稅 六錢</p>
--	---	---	---	--

愛子叢書

第一篇 島崎藤村作 眼 鏡 四版 定價各四十錢
 第二篇 田山花袋作 小さな鳩 再版 厚表紙 郵稅各六錢
 第三篇 徳田秋聲作 めぐりあひ 新刊 頗美本

少女文庫

第一篇 東草水作 少女小説 桃割れ 四版 定價各廿錢
 第二篇 星野水裏作 小僧泣かせ草 三版 郵稅各四錢
 第三篇 富岡波川作 灯ともし頃 再版 郵稅各四錢
 第四篇 渡邊白水作 世界少女くらべ 三版 定價四十五錢
 增刊十五記者合作 美代子 三版 郵稅四錢

<p>▷ 東草水著</p> <p>青い鳥 六版</p> <p>定價 三十錢 郵稅 四錢</p>	<p>▷ 星野 水裏作</p> <p>口語詩 濱千鳥 增訂七版</p> <p>定價 二十五錢 郵稅 四錢</p>	<p>▷ 渡邊 白水著</p> <p>少女美談 三版</p> <p>定價 六十錢 郵稅 八錢</p>	<p>▷ 岩下 小葉著</p> <p>少女小説 涙の物語 七版</p> <p>定價 卅五錢 郵稅 六錢</p>
---	--	--	---

實業之日
 本社發行
 大定期刊行物

■ 實業講習錄

▲每月二回發行(每號二百餘頁)▲一ヶ月(三期)五十錢▲三ヶ月(六期)一圓四十五錢▲六ヶ月(十二期)二圓八十錢▲一ヶ年(四十八期)五圓五十錢

□

■ 實業之日本

▲一冊十一錢郵稅一錢五厘▲每月二回一十五日發行▲年二回增刊▲半年分增刊郵稅共一圓六十五錢(新年度は十錢増)▲一ヶ年分三圓廿錢

□

■ 婦人世界

▲一冊十五錢郵稅一錢五厘▲每月一回一日發行▲半年分增刊郵稅共一圓五錢▲一ヶ年分同二圓五錢

□

■ 日本少年

▲一冊十錢郵稅一錢▲每月一回一日發行▲秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七十錢▲壹年分一圓卅五錢

□

■ 少女の友

▲一冊十錢郵稅一錢▲每月一回一日發行▲秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七十錢▲壹年分同一圓卅五錢

□

■ 幼年の友

▲一冊十錢郵稅五厘▲每月一回一日發行▲六冊郵稅共五十八錢▲十二冊同一圓十錢

□

終